
女神と殺人鬼とバカと野獣と

天タカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神と殺人鬼とバカと野獣と

【Nコード】

N1970L

【作者名】

天タカ

【あらすじ】

超能力が当たり前になった世界で、処理屋を営む田中 太郎。当たり前前の日常、当たり前前の景色、当たり前前の世界。そこに現れる一人の女の子。

余りにもその子が眩しすぎて、当たり前前の世界は色を失った…

プロローグ 雨の日…

雨の日だったと思う。

目の前に広がる景色は自分にとって信じられないもの。血が流れ、泥だらけになり、ゴミのように転がっている大切な人。自分にいろんな楽しい話をしてくれたり、夢を語ったり、笑顔が良く似合う人。恐らく自分はこの人の事が好きだったのではないかと思う。

故に信じられない。

この人は私を護り、

この人は私の味方で

この人は私の初恋の人で…

その人の背中には一本剣が刺さっていて

その剣はその人の急所を捉えている。

私にだって解る。

その人は助からないことが。

その人は私を探す様に手を伸ばし、私の目を見て

…あと 少し…ク ソ…

そう言つて息絶えた。私は泣いた。

大切な人の死を目の当たりにするのは二度目。
前の時より私は泣いた。

泥だらけになりながらも、顔に流れるものが目から溢れた涙なのか、
激しく顔に当たる雨なのか、鼻水なのか分からないほど泣いた。叫んだ。

ただ叫んだ。

その人は言っていた。俺の名を呼べ。

辛くて、苦しくて、どうしようもない時は

俺の名を呼べ。

そしたら俺がお前を救ってやる。

護ってやる。

お前を苦しめているのがどんなモノでも、俺はお前のために戦ってやる。

俺はどんな時でもお前の味方だから。

だから叫んだ。

辛くて、苦しくて、どうしようもなくて、

だけどその人は動かない、助けてくれない、救ってくれない。

それが自分に更なる悲しみを与える。

雨はその激しさを増して、私の心に幾つもの波紋を作り出す。

そこに現れる人影。

自分の大切な人を殺した張本人。

大切な人を二度も奪った張本人。

私はその人に叫んだ。恨んだ。

妬んだ。

その怒りと雨で目が曇り、

その人の顔がどこか寂しそうだったのに自分は気づけなかった。

雨はさらにその激しさを増し、私の叫びを消し去る。

だから私はもっと大きな声で叫ぶ。

大切な人はこの世を去り、その人を殺した人はもう遠くに行っ

まい届かない。

それでも私は叫んだ。叫び続けた…

その時私には叫ぶことしかできなかったから。

EP1-1 地味とバカと野獣

私 長谷川 加奈子は今ストーカーされている。

ストーカーが始まったのは1ヶ月前ぐらい9月の中頃に気づいた。気づいてしまった。

気づけたのは奇跡に近い。友達とバイト帰りにふと後ろを振り替えると曲がり角の影の中から2つの瞳が此方を見つめているのに気づいた。

最初は見間違いかと思った。ストーカーというのは美人な人がされるモノだと思っていた加奈子は見て見ぬ振りをした。

しかし、その曖昧な疑心が確信へと変わるのに時間はかからなかった。

加奈子は親にかなり無理をいって専門学校に入らせてもらった。払うのは学費だけ、そういう約束。

だからアパート代も生活費も自分で払わなくてはいけない。自然とバイトの時間は夜遅くまで働かざるを得ない。

それでも加奈子にとっては苦ではなかった。したい事ができ、充実した時を過ごしてきたからだ。

その充実した時間にヌルリと入りこんできた異物。

今までストーカーの事件を聞いても怖いな〜と思う程度だった。自分になるはずがないと。

加奈子と思う。今まで他人が味わってきた恐怖はこれなのかと。ストーカーぐらいで何をそんなにとか思っていた。人間は他人の心の少しも理解できてはいない。同じ境遇に立って初めてその他人の心を少しでも理解できるのだ。

虐めがその典型的な例である。

警察にも助けを頼んだ。警察は警戒を強化するので安心して下さいと言っていたけれど、ストーカーは一向に終わる気配は見えない。それどころかだんだんエスカレートしていった。この前なんて肩を捕まれ、脅されかけたぐらいだった。

警察はたよれない。何かされたら連絡をください。なんて何かされた後に言っても遅すぎるだろと加奈子は思う。

友達にも相談をした。帰ってきたのは、昔の自分と同じ。軽い恐怖心と同情心。中には幾つかの対策法を教えてくれたり、何人かの男友達が護ってやるなんて言ってくれた人もいた。

超能力が当たり前になった世界で見た目の強さなんて関係ないのだと加奈子は思った。

ストーカーからの護衛のために何人かの男友達と帰っていると前から突然ストーカーが現れる。身長は高いが細身であり強さは感じられない。

こちらの中にはボクシングをしている人もいるし、攻撃的な超能力をもっている人もいる。

本来超能力とは人間の可能性を広げるという名目で産まれたモノ。災害の時などにどうしても重機がもってこられない場所などで超能力を使って何人もの命を救ったり、普通の人間では無理な手術などを軽々とこなす医学界に新たな可能性を産み出した人もいたりするなかで、犯罪などの事件なども増えているなど負の面も持ち合わせている。

が凶悪な犯罪件数は超能力がなかった頃より減ってきている。日本では超能力の覚醒は義務化され超能力が使えない人は殆どいない。超能力での犯罪を超能力で解決する時代なのだ。故に未解決事件なども殆どなくなってきた。

超能力は一人一つしか覚醒しない。それは普遍の事実。何が覚醒するかもほぼ運しだい。研究者の中には覚醒する能力こそその人の本質なのだと力説している者もいる。

一度覚醒した能力は変えはきかないし、大きなくくりでまとめられることはあれど、一人一人同じ能力の者はいない。

能力は鍛えれば精度が上がるし、力も強くなったりする。故に人は見た目で判断してはいけないという言葉は現実味を増してきている。

実際加奈子の目の前で起こったこともそれなのだろう。

何人もの友達がそのひ弱そうな青年にやられていく。

それからそのストーカー事件に周りの人達はあまり関わらなくなつた。

それからストーカーは続いている。加奈子は壊れかけていた。あまりの恐怖に、あまりの理不尽に。

そして遂に心が限界を迎えた時叫んでいた。加奈子の力は自分の身を守る力もなく、相手を傷つける力もない。それでも叫んだ。ストーカーに。

青年は姿を現し、此方に向かってきた。

加奈子は壊れかけた感性で殺されるかもしれないと思った。

青年は加奈子の襟を掴み、そのまま塀に押し付ける。加奈子は動けなくなった。

青年の力だけではない。恐怖で身体震えて動かないのだ。

青年はニヤリと不気味な笑顔をこちらに向けてくる。

「観念した？とりあえず今まで僕にしてきた愚行に対して謝つてくれないかな…」

「うめ…うめ、ごめんなさい」

震えてうまく言えない。

「あ？ちゃんと見えよ。」

青年はそう言うと、加奈子を叩きつける。

痛みで動けなくなる。それでも加奈子は震えながらぼんやりと殺されるなとおもっていた。

「オラっ！見えよ。許してくださいって。ごめんなさいって。ほら」

「あ…あ あ、あ…」

涙で顔がぐしゃぐしゃになる。

助けて…誰か助けて…心の中でそう叫ぶ。

そしてその心の叫びは届く。

「謝る必要なんてアンタにはねーよ。」

現れる三つの人影。

「誰だ？アンタ等」

加奈子を抑えていた足をどけ、現れた三人に注意を向ける。

加奈子はこの三人に会ったことがある。

「田中君！この人です！」

加奈子は叫んだ。恐怖で壊れかけた心が少しずつ元に戻ってきたのを感じる。

ストーカー青年は加奈子のほうを少し見て、三人に同じ質問をする。

質問に答えたのは平均ぐらいの身長で黒髪でどこにでもいそうな青年。

「田中 太郎。」

田中 太郎なんてあまりに普通すぎて逆に珍しいレベルの名前。ストーカー青年は思わず笑う。

「悪いけど、今加奈子ちゃんとお話中なんだよね…どっか行つて

くれない？」

それは脅し。

行かなければどうなっても知らないよというストーカー青年の忠告である。

「何？告白でもするの？でもちよつと過激すぎね？いくら表現の自由が許されてるからってこれはな。

加奈子さんの綺麗な顔が涙で台無しだよ」

金髪の青年がいかにもかっこつけながらストーカーに言い返す。

加奈子はその青年の名前を知っている。和気 義行。しつこく加奈子に名乗ったのでよく覚えている。

そして残りの二メートルはあるんじゃないかと思わせる巨人の名前は阿倍 拓郎。

三人に対する加奈子のイメージは地味、バカ、野獣。

しかし、不思議と加奈子はこの三人に安心感を感じた。

ストーカー青年は不気味な笑顔を顔に浮かべて、突然三人に走っていった。ストーカー青年は右腕を振り降ろす。それだけで阿倍以外の二人は後ろに飛ばされる。

「コイツっ！念動力系かよ」

飛ばされながらも、和気は分析をする。

しかし、驚いたのはストーカー青年も同じ。相手の力も解らないので、全力で力を使ったはずだったのに、阿倍は全くと言っていいほど動じなかったのである。

ストーカー青年に焦りが生まれる。

青年はまた力を使おうとするが、その前に阿倍の強烈な拳が青年を襲う。

二メートルぐらい飛ばされて青年は動かなくなる。圧倒的である。

加奈子はその光景に動けなくなっていると、突然和気が隣に現れる。

「大丈夫ですか、加奈子さん。もう安心ですよ。俺達の力をもって

すればこの程度の仕事朝飯前ですから。」

「やったの殆ど阿倍君じゃ……」

「アハハハ！ お礼なんていりませんよ。でもどうしても言うのならはその豊満な胸を1揉み、いや、2揉み」

えっえっ？と加奈子が困っている後ろから和氣の顔面を田中が蹴り飛ばす。

「金は前払いでもらってるんだし、黙ってる。」

立てますか？と言いなから手を差し出す田中。

「ありがとうございます。まさか本当に来てくれるとは思いませんでした。」

加奈子は誰も助けられない中で必死に助かる方法をさがしていた。そして見つけた。その名も処理屋。どんな問題でも軽やかに解決。それが謳い文句だったので、加奈子はすぐに連絡。直接会い、相談。値段の安さと前払い制に胡散臭さを感じていたが、まさかここまでやってくれるとは思わなかった。

田中は加奈子を立たせると笑顔を見せる。加奈子はその笑顔に力を貰った気がした。

世の中捨てたもんじゃないな。

加奈子は自然とそう思えた。

気がつくと加奈子は微笑んでいた。

EP1-2 当たり前の日常 世界 心

「あーい。俺の買つといた高級プリンが姿を消した。誰が食った？あ？」

朝、住吉荘の共通の台所に田中の声が響く。

ここ住吉荘は三階建ての4部屋。住吉荘自体はそこそこ大きな構造で4部屋なため1部屋1部屋がそこそこ広く。1人で暮らすにはある程度の余裕ができる。トイレと風呂は各部屋にあるが台所がない。台所は一階空間全てを使って共同フロアとしてできている。

そこには冷蔵庫などもあるためわざわざ部屋に冷蔵庫も置く必要もなく、皆そこ利用している。

そんな奇抜な構造になっているのは、管理者曰く人との関係を大切にするためなんて言っているが、本当は管理者であり、住吉荘の住人の1人である高倉 徳子が一切料理ができないため他の住人が作った料理を頂こうというわけである。

田中がこの荘に来てから10ヶ月がたつ。

今では田中がご飯を作り、住人みんなご飯を食べるまでの関係に進展した。

「私じゃないよ。」 力のない返事をしたのは住人の1人の日野 光。黒髪でポニーテールの女性。中々の美人なはずだが、アルコール中毒＋変態なため女性として見る事ができない残念美人。ちなみに大学生らしい。

「香なわけないし。」突然田中に話を振られ顔を真っ赤にしているのは、橘 香。

田中が営む処理屋の紅一点で要となる情報屋である。極度の恥ずかしがり屋で他人と話すことができないため、香は常にホワイトボードを持ってそれで会話をしている。更にかなりのドジッ娘で、和気 曰く、この娘は天性の素質があるらしい。

所有する能力はエレクトロ・プラズム。

要するに電撃を操る能力。

出会った最初の頃は話しかけるたびに電撃を浴びせられたのを田中は覚えている。

金髪で長さは肩にかかる程度。顔は可愛らしく、その奇抜なキヤラとドジッ娘ぷりが相まって学校の男子からは人気が高く、女子からもその小動物の様な姿に母性本能がくすぐられるらしく、香は望まない事ではあるが皆の輪の中に入っていている。

ちなみに田中や他のメンバーと同じ高校で同学年、一年生である。さらに香は処理屋の財布係で仕事の報酬やお金の管理は彼女がやっている。その金と集めた情報で資金は瞬く間に増えているため田中は生活費などにも心配はなく、更に更に、彼女は処理屋の噂や情報を色んな所に流しているお陰で仕事にも困ってはいない。まさに処理屋にとってかけがえのない人となっている。

「阿倍は甘いのは苦手だし徳子さんは昨日からいないし。」
簡単な消去法で犯人は確定。

「俺のプリンとは旨かったか？あんなに殺したるか？」

もの凄い形相で迫られているのは和気。

「お前が言うとは冗談っぽく聞こえないな」和気の顔には冷や汗。

「俺のプリンは旨かったかって聞いてんだよ。とりあえず謝れ、土下座しろ コラ」

田中はさらに和気に迫る。

「昨日なんとなく冷蔵庫を開けたら、そんな気はなかったのにプリンを見つけてしまった…君ならどうする？」

最高だった…」

和気がしたのは完全なる開き直り。

それが田中の怒りを加速させる。

住吉荘の食卓は今日も賑やかである。

「加奈子さん綺麗だったな」

そんなバカな話するのは和気。

朝あんな事が有りながらも、田中と和気と阿倍は三人仲良く登校中。住吉荘から高校までは歩いて15分。香は途中で忘れ物をしたと、走って住吉荘に戻っていった。

いつも四人は学校にギリギリ着くぐらいの時間に住吉荘を出るので、走って戻って、走っていったとしても遅刻は免れないだろう。

「加奈子さん元気でやってるかな」　せめて連絡先でも聞いときや良かったかな。　はっ！香に調べてもらえば……」

「それじゃあのストーカーと変わらないだろ。バカ」

「バカって言うな。」　「バカバカバカバカバカバカ……」

「うわーん。田中が俺苛めるよ！阿倍助けてくれ」

「バカバカバカバカバカバカバカ……」

「はっ！いつもは無口な阿倍までも！何これ！呪詛の二重奏！？バカな俺に逃げ場なし！？」

「自分の事バカって言うてるじゃーか」

「自分で言うのと美人に言われるのは許せるがヤローに言われるのだけはゆるせないんだよ。ハハハハ！」　ピキーンと決めポーズをとる和気。

「バカな上に変態か…重症だな」

「ム……」

二人は和気を無視して先に進む。

「ちよっ！待てよ。まさかの壮大なる仲間外れの予感！？」

そんなこんなで1日が始まる。

三人は同じクラスの1ー1。

三人は席に着き、和気は他のクラスメイトと話し込み、阿倍は授業の準備をし、田中は机に突っ伏し寝始める。三人が三人別々の行動をする。

三人に共通点は一見すると見つからないが三人にも共通点はある三人が三人どこか寂しそうな雰囲気を出しているのだ。

当たり前に1日が始まり、授業が始まり、当たり前に1日が終わる。当たり前の日常。

学校の帰り道ふとそんな事を考える田中。

少し前の自分では決して手に入れる事はできなかった日常。

自分はそんな日常を求めてたはずなのに今はその日常に退屈している。なんだこれ。なんて思っている。

住吉荘に戻ってくると共同フロアに人影が1つある事に気がつく。

住吉荘の管理者高倉 徳子。真っ黒な服を着て、不思議な雰囲気をだしている。

突然いなくなったり、帰ってきたり。

まるで野良猫を思わせる行動は更にその不思議な感じを神秘的にさせる。

「帰ってきたのか、少年。青春してるか？ 学生の本分は青春だぞ。青春こそ学校生活の全てであり、人生の宝になる。まあ、貴重な青春タイムの放課後をこんな所で過ごす少年に言うことではないか…」

「大きなお世話ですよ、徳子さん。それより今日晩飯どうします？ リクエストがあれば…」

「肉がいい」

質問する前に答を言い、自分の部屋である。1号室に戻るために共同フロアを出ていく。全く…苦笑しながら自分も自分の部屋に戻る。田中の部屋は3号室。四号室は香、二号室は光。となっている。当然和気と阿倍の部屋はどこかなのかという疑問がでてくる。

答は簡単。田中と一緒にルームシェアをしているのだ。

本当は阿倍はともかく和気てなんて一緒に暮らすなんて嫌なのだが、どうしようもない。そればかりはどうしようもないのだ。

しばらくして阿倍や和気、香が帰ってきて、夕飯の準備をして、光が帰ってきて、騒がしい夕飯を食べ終わり、各々部屋に戻る。3号室に戻った三人はそれぞれ自分の決めた場所に居座り、別々の事をしながら談笑をはじめ。

当たり前の日常。ただどこか落ち着いて、静かで、心地よくて。田中はこんな時間こそが幸せか時間なのではないかと思う。しかし、そんな日常は呆気なく終わりを告げる。

ドンドンと激しくドアを叩く音。

部屋の前に呼び鈴があるのにも関わらず、荒々しくドアを叩く。そんな人、三人には1人しか思い付かない。

だが、この予想が外れればいいのにと願う。「私だ！部屋を開けてくれ！」

女性の声。三人とも良く知る声。

願いは簡単に潰える。その女性は四人をこの住吉荘に住まわせ、処理屋を営わせている張本人。

瞬間、三人は目を合わせ、意思を電信させる。超能力ではない。三人は解っているのだこの女は録事しか持ってきてやしないのだ。部屋に上げず、誰もヤツに干渉することなく帰ってもらう。

—居留守—

三人の頭にその言葉が過るのにかかった時間は一瞬。

気配を消し、帰るのを待つ。

しばらくしてドアを叩く音が止み、声が聞こえてくる。

「いないのか…仕方がないな…」

三人は気配を探り、完全に居なくなつたのを確認する。

助かった—

三人は突然の危機からの回避にお互いに褒め称える。

和気は部屋の空気を変えようと窓を開けようと、カーテンを開く。時期的には10月で肌寒い季節だが、そのくらいのほうが緊張しき

った体を目覚めさせるのにちょうどいい。

田中は気づく。和氣がカーテンを開けてから一切動かない事に。

田中と阿倍が気づいたのはほぼ同時。

窓の外から覗き込む女性の顔。

三人にとってすべての元凶、災厄。

その女性の名はマリア。

マリアは動けなくなった三人の顔を見て、口を動かす。

—まだまだだな—

「まったく、師匠を騙すなんてとんだ悪餓鬼だなてめえ等は」

マリアは出されたお茶と茶菓子をバリバリと食いあさっている。

三人はもれなく正座。「騙すってゆうか悪ふざけてゆうか…」

和氣は恐る恐る言い訳を言おうとする。

—ヤバイ—

他の二人に戦慄が走る。が時既に遅し。和氣の顔にマリアがさつきまで飲んでいた湯飲みがぶち当たる。

「ギヤアアア…！目が、お茶がつ！」

和氣はあまりの痛みのにたうち回る。

「言い訳は聞かん。うざりたい！」

そう言うとまた茶菓子を食べ始める。

マリア。田中にとってすべての始まり。

そのスタイルはモデルですら羨ましがるくらいに引き締まっており、その容姿はすべての男性を振り向かせ、その自信はすべての者に信頼と恐怖を与える。例えるならば、この人は嵐。

そんなことを考えていると田中はマリアの隣に座る1人の女の子に気づく。

「あの…そちらは…娘さん？」

ちよつとした冗談のつもりだった。

マリアは見るからに独身女。しかし、もういい歳はいつているだろう。そんなちよつとした皮肉のつもりだったのだが、田中はすぐに

後悔する。

茶菓子を入れていた容器が顔に当たる。

「ギヤアアア……！！かつ、角があああ！」

「あ？ 何か言ったか？」

「言ってますん。」

三人は再び正座。

「だが良い所に気がついたな。この子は……魔術師だ。」

「……は？」

その訪れによって全てが変わった。

当たり前前日常。当たり前前世界。当たり前前心。

全て、総て。

EP1-3 一色 朱奈

「という事でしばらく厄介になることになった。日本名は一色 朱奈。よろしく。」

ものすごいざっぱりとした自己紹介。

突然加わった新しい住人の出現に住吉荘の朝の食卓は静まり帰っていた。

朱奈のあまりに堂々とした態度に周りはただ、ただ呆然としている。
「ム？何をしているのだ？速く食わねば学校というのに遅刻するのではないのか？」

朱奈は周りの反応などお構い無しにご飯を食べている。
はあ。

と男三人は深い溜め息をつく。
頭が痛い。

「どうした？元気がないぞ？朝それではこれからどうするのだ。」

「お前が原因だよ…」

三人は同時にツツコム。

「ねえねえ、田中君…」

「何ですか？光さん」

「この娘今一色って名乗ったよね？一色ってあの有名な一色さんだよね？なんでこんなところ居んの？」

「色々あつて…」

「どうやら色々と事情がありそうだな。ま、あの女が絡んでる時点でまともではないがな」

「わかってくれますか…徳子さん」

そんなやり取りをしている一方朱奈は香に興味を示したらしく、いじくりまわしている。

「どうして口で喋らんのだ。ちゃんと会話が成り立たないではないか」

香は顔を真っ赤にし急いで席を立とうとするが椅子がバランスを崩し、ボタンと転んでしまう。更にその拍子にテーブルの皿が飛び、朝御飯のスクランブルド・エッグが止めと言わんばかりに香の顔に落ちる。

朱奈はあわてて手を貸そうとするが香が素早く動き部屋からでていく。

「むう？変なヤツだな。どうしたというのだ？」
お前のせいだよ…

田中は心の中でツツコム。

今から数時間前にまで遡る。

「この子は魔術師だ」

「……は？」

聞き慣れない単語に三人とも思わず聞き返す。

「だから魔術師なんだって。理解したか？」

「イヤイヤイヤ。ちよつ待って！理解したかつて無理でしょ！魔術師だ。はい、そうですかで済むと思ってんですか」

和氣が珍しく正論を述べる。

「む？まあ、解らんでもないが、世界には自分の想像もつかないモノなんていくらでもあるのだから、魔術くらいどうってことないだろ」

平然と言つてのけるマリア。

「この子は日本では四職と呼ばれる特別な一族の子で、日本名は一色 朱奈と言う。一応日本語も話せるしコミニケーションには問題はないだろ」

「イヤイヤイヤ！問題ありまくりでしょ！何で突然の自己紹介？何

？コミニケーション？突然すぎてまるで話に追い付けねーよ！てゆうか魔術の件はもう終わり？」

和気は激しく反論する。

「じゃあ、単刀直入に言うとな…この子はある事情で命を狙われている。しばらくここで面倒みてやってくれ。」

「はい意味わからない！理解できない！」

和気はうるさいので一旦黙らしとして、田中は冷静に質問する。

「誰に命を狙われているんですか？」

「教えられない」

「面倒ってここで？この部屋で？」

「うん」

「俺という存在を忘れてませんか？」

「問題ないだろ」

「香の部屋は？」

「あの子はコミニケーションがとりにくいだろ」

「俺たちに拒否権は？」

「ない」

「はあ」

三人が何回目になるかわからない溜め息をつく。

これだ。これなのだ。これこそマリア。

自分勝手、破天荒、自己チュー。

しかし、三人が三人、マリアに大恩があるため皆、頭が上がらない。田中の時もそうだった。

四年前、自分の人生を呪っていた田中の前に突然マリアが現れ、摩訶不思議な力でいとも簡単に田中を救ってしまったのだ。

あれ？

と田中の頭に疑問が浮かぶ。

「マリアさん。アンタも魔術使えんの？」

「ああ！もちろんだ。」

「もしかして、あの時使った力って魔術？」

「あの時？ ああ…あの時の魔術だぞ」

それならば田中は魔術の存在を認めないわけにはいかない。

田中は魔術で救われたのだから。

するとマリアは突然立ち上がり、窓を開ける。

「じゃ、私はいろいろ忙しいから、この子の事よろしく頼むな！」

それだけ言つと窓から飛び降りる。

思わず窓から頭を出す三人。

ここは三階。

それほどの高さでは無いにしても、女性が飛び降りるには無理がある。

しかし、マリアは悠然と着地。

上の三階の三人に笑顔と軽い挨拶を送る。

三人の頭には同じ疑問。

何故わざわざ窓から？

「おっ？なんだこの本は？」

呆然している三人の思考を有無を言わず中断させる可愛い声。

三人は同時に振り向く。更に同時に衝撃が走る。

朱奈と名乗った魔術師は和気が変態大学生の光に借りたエロ本に興味を示したのか、エロ本に手を伸ばしている。

エロ本の表紙が彼女から見えないようになってるのが不幸中の幸いだろう。

一瞬。

阿倍は伸ばしている手を掴み、田中はエロ本に飛び付き和気にパス。和気はそれをベタにも背中に隠す。

てゆうか見知らぬ他人の部屋に来て、少しも臆すること無く興味の示すままに行動する彼女の行動力に三人は早速面を喰らう。

「うお！？一体なんなのだ？びっくりしたぞ！」

「びっくりしたのはこっちだ！いきなり何しとんじゃ！ガキ！」

エロ本に飛び付いたために倒れている田中が思わずツツコム。

朱奈は何の躊躇いもなく田中を左足で踏みつける。

「五月蠅いぞ。貴様は一体誰に向かってガキ呼ばわりしているのだ！私は一色 朱奈だぞ！ それにお前！」

朱奈はエロ本を隠そうとしている和氣にビシッと指差す。

「それを私に見せるがいい。これから私達は命を預け合う仲になるというのだぞ！ 私達の間隠し事など言語道断だ！それを渡せ！」
左足を退かそうとする田中を加えた三人が途端にうごけなくなる。

見せれるわけがない！

朱奈が言った事は正論。これから赤の他人と暮らすのだからなるべく秘密は作りたくない。

でも、だからこそ三人は見せるわけにはいかなかった。

これから暮らすのに初日からこんなモノを見せれば四人の関係はギクシャクするのは当たり前。

田中と阿倍は同時に視線を和氣に向ける。

その視線が語る意味を和氣は理解する。

…お前がどうにかしろ…

元々和氣がまいた種である。二人が和氣を睨むのは当然。

「てめえ等裏切るのか！この前貸してやったじゃねーか！」

叫ぶ和氣。

「止めるよ！そんなリアルな嘘つくの！お前がどうにかしろ！」

「何を騒いでいる！さっさと渡せ！」

三人は再びうごけなくなる。

「こ…これは、あ、あれだ！18歳にならないと読めないモンなんだよ！ざ、残念だったな…」

こちらもまた正論。

本の表紙にはR・18のマークが表示されている。

18歳未満の者は見ることはできない。

「たわけ！ マリアが言っていたぞ。貴様等とて18歳ではないはずだ！」

あっさり看破。

「貴様等が見ることができて、同年代の私が見れないはずがないだろ！馬鹿者」

さあ、渡せと言わんばかりに手を伸ばしている朱奈。
しかし三人は別の意味でうごけなくなる。

俺達と同年代？

あり得ない。あり得るはずがない。

朱奈は身長推定135程度。髪は黒で腰まで伸びる長髪は大人っぽい、容姿は可愛いけどどうみても高校生の顔つきではない。小学生とまではいかずとも中学生。

ランドセルを背負わせれば小学生です。と誤魔化せるレベルである。

「嘘つけ！」

和気と田中は同時にツツコム。

阿倍は朱奈の姿をじつと見ている。

「む？」

「む？じゃねえ！お前が俺達と同年代なはずがねえだろ！頑張っても中学一年生だぞ！」

朱奈はカチンときたのか肩を震わせている。

その時部屋の呼び鈴がなる。

和気はドアを開け、来訪者を確認。

来訪者を見た瞬間三人はまたうごけなくなる。

来訪者は香。

香がこの部屋にくるのは仕事からみの時と、もう一つ。

香の趣味はエロ本鑑賞。こんな恥ずかしがり屋に似合わずエロ本が大好きなのだ。

マリアが朱奈を香の部屋にではなく、男三人の部屋に置いていった理由の一つ。

そして香がこの部屋にきたもう一つの理由は和気にエロ本を借りてきたのだ。

その証拠に香は掌をひよこつと前にだしている。

マリアとはまた別の嵐が住吉荘にやってきた。

そんなこんなで三人は今ものすごい疲れている。

さすがに女の子を床に寝せるわけにはいかないので、三人が交代で使っていたベッドを使わせ、三人は床で寝たため当然のごとく疲れはとれるはずがない。

朱奈には三人はひとしきり落ち着いた後に昼間は学校に行っていること。故に昼間は住吉荘に一人で待っていて欲しいなどと基本的なルールを決めた。

疲れた田中の顔を面白そうに光は突つつく。

「いいな〜 楽しそうだな〜。エロ本くらい別にいいんじゃない？」

「黙っててください。」

「ケチ〜。私なんかも毎日見てるよ〜。」

「知ってます。アンタと一緒にしないでください」

そんなこんなで学校に行く時間になり、疲れた体を引きずりながら学校に向かう三人。

これからどうなるんだろう…

おそらくほとんどの人達が生きている内に感じる不安を三人は感じている。

体が重いのは、疲れだけではない。

そんな三人のことなど知らん顔だと言わんばかりに今日は雲一人な
い快晴だった。

EP 1 - 4 静かな放課後

「ただいま」

「お帰り！お前一人なのか？」

学校が終わり部活もやっていない田中は特にすることなかったの
で真っ直ぐ帰宅。

田中は朱奈がいることも半分忘れていたため朱奈のお帰り！に少し
驚く。

誰かにお帰り、なんて言われたのもなんだか久しぶりに感じる。
こういうのも悪くないなとか思っていると、何やら朱奈はごそごそ
としている。

「何してんだ？お前」

「何って、外に行く準備に決まっておるだろう。貴様こそ何をして
いる。ポケットとしていないで、早く出かける準備をしないか！」

「貴様じゃねえ、田中 太郎だ。」

「貴様こそ私は一色 朱奈だ。お前こそ私の名を呼べ！」

「いいのか？お前、超お嬢様なんだろ？そんな馴れ馴れしく呼んで
も大丈夫なのか？」

「当たり前だ。私に変な気をつかうでない。そうゆうのは何か…う
ざったい。」

うざったい

恐らくこれは朱奈の心からの本音なのだろう。

様々な人に特別扱いされ、対等な関係など持ったことのない朱奈の
本音。

「そうかい…じゃ行くぞ。朱奈。」

「気安く私の名前を呼ぶな。馬鹿者」

田中のせつかくの気遣いは台無し。

朱奈はごそそと荷物をあさっている。

「さつきと言ってる事が違うじゃねーか」

田中はぼそつと呟きながら朱奈のほうを見る。

チラリと見えた朱奈の顔は少し紅くなり、口は微笑んでるように見える。

「効果抜群じゃねーか」

田中はニヤケながらまた呟いた。

住吉荘から少し歩いた所には商店街がある。他のスーパーなんかより商品は安く、街は買い物客で活気満ちていて田中はこの商店街が好きだった。

「田中！あれは一体なんなのだ！？」

朱奈は商店街に来てからずっとこの調子。

今度はわたあめに興味を引いたようで、屋台おじさんが子供達にわたあめを作っている姿をずっと見ている。

「食べてみるか？」

ある程度の買い物も済ませ、少し余裕もあるため、わたあめに目を輝かせている朱奈に買おうかと聞く。

朱奈は頷こうとしかけるが、わたあめを買っている子供達の年齢を予測。

いくら見たことも無く、興味をどれだけ引く品でも、年下の子供達のようにわたあめではしゃぐのは朱奈のプライドが許さないのか、首を横に振る。

朱奈は見るからに子供の様な姿をしているが、田中と同年代なのだ。しかし、お腹からぎゅーっと空腹を示す音が鳴る。

朱奈は顔を真っ赤にし、反論。

「ちっ、違うぞー！これは食べたいとかではなく…」

必死に反論する姿は子供そのもの。

そんな朱奈の頭の上にポンツと手を置いて朱奈を止める。

そして黙って屋台の所に行き、わたあめを2つ買う。

「いや、俺も久しぶりにわたあめ食いたくなってな…そのついでだよ。お前食べた事ないんだろ？ほれ」

といつてもう一つのわたあめを手渡す。

朱奈はまだ顔が紅いが、黙って手にとる。

「しょ、しょうがないな。せつかくの善意を無駄にするのもなんだしな…」

ぶつぶつと朱奈は呟きながらわたあめをしゃぶる。

「甘い」

「うまいか？」

「うん…うまい…」

どうやら朱奈はわたあめを気にいってくれたようだ。

わたあめをむしゃむしゃと、しかしわたあめの食感を楽しむように食べている。

そんな朱奈の子供っぽい姿に思わず笑ってしまう。

すると朱奈はわたあめを食べることも忘れて田中の顔をじっと見ている。

笑いすぎたかな…

田中はそう思い謝ろうとすると朱奈は思いがけないことを言った。

「お前…笑顔が良く似合うな。」

今度は田中の顔が少し紅くなる。

それも気にせず、朱奈はじっと田中の顔を、しかしどこか遠くを見るような顔で見ている。

田中はこれまでに笑顔が似合う。と何回か言われたことがあった。しかし、異性に言われた経験はないため、面を喰らう。

「どうしたんだ？急に」

「いや、そう思ったただけだ。少し意外だったから」

変なヤツだな…

そんな事を思いながら、二人はまた歩き出す。

最後の買い物も終わり、住吉荘に帰ることにした。

結局あれから朱奈は考え込むように無口になった。

先ほどのように何を見ても興味を示さず、田中が話を振っても一向に反応しない。

時々田中の顔をじっと見たりするだけだ

やっぱり怒ってんのかな…

田中の超能力は読心系ではないため朱奈の心を知る術はない。

田中がそんなことを思いながら、ふと頭を上げると空はなんだか曇ってきている。

どうやら明日は雨になるかもしれない

「明日は雨かもな」

田中は呟く。

それを聞き、朱奈も頭を上げ、空を見上げる。

「お前…雨は嫌いかな？」

突然朱奈が質問してくる。

「どうしたんだ？急に」

「私は雨が嫌いだ。じめじめするし、気分が暗くなる。」

無視かよ…

田中は心の中でツツコミつつも朱奈の突拍子もない質問に答える。

「俺は…俺は雨は好きだな。」

「何故だ？」

「なんていうか…たぶん俺は雨の静けさが好きなんだと思う。雨粒が岩にあたる音とかさ、気持ちの良い静けさっていうのかなあ…」

久しぶりに詩人の様なことを言ってみる。

見ると、朱奈はまたもや田中の顔をじっと見ている。

「どうしたよ？お前がいろいろ反応してくれないと、俺ただの痛い

人じゃんかよ」

「む？すまないな…少し考え事をしていた…」
そう言つてまた黙る。

しばらくしてから沈黙を破るは朱奈。

「よし！田中、私と手を繋ぐことを許す。繋いでいいぞ。」

急に楽しげに朱奈が手を差し出す。

「いつ俺が手を繋ぎたいなんて言つたよ。オイ」

「いいのか？もう一生繋ぐことなどできぬかもしれぬぞ。」

と言つてさらに手を田中に差し出す。

どうしても止める気配を見せなかつたため、しかたがなく田中は手を握る。

意外と温かい。

「やつぱり思つた通り田中の手は温かいな」

「どうしたんだ？お前」

「どうもしない」

「なんか変だ」

「変ではない」

明らかに朱奈の様子は変だが、どうやら機嫌はよくなつたようだ。
手を繋ぐ二人の後ろ姿はどこか親子のようでありながら、恋人のようであつた。

その夜。

住吉荘の食卓に異変。

「一体何したんだよ？お前？」

田中の反対側の席に着く和氣が聞いてくる。田中の左隣の席の阿部はただ黙つて成り行きを見届けようとしている。

住吉荘の食卓に起こつた異変。

それは…

「田中！これはお前がつくったのか？ 凄くおいしいぞ」

口の横に食べかすを付けながら、朱奈は無邪気な顔で田中に笑顔を向ける。

今日の朝まで光の席だった田中の右隣の席には朱奈が座っている。ちよっとした異変。

しかし、大きな異変。

理由は田中にもわからなかった。

EP1 - 5 雨の日に

夢を見ていた。

降りしきる雨の中

その人は言った。

私は雨が好きなの。

ぽたっ、ぽたっって

静かで。

でもそれは気持ちがよくて

だから私は雨が好き。その人は私に笑ってそう言った。

私は雨が嫌いだった。太陽が見れなくなるし

遠矢やえりと外で遊べない。

あの人は私に言った。俺は雨が好きだ。

静かで、静かで

雨音が心地よくて

それに耳をすましてる間だけ、自分が何者か一時忘れさせてくれる。
だから俺は雨が好きだ。

だけど私は雨が嫌いだった。

その人もあの人も雨の日に殺された。

だから雨の日が嫌いだった…

ガバツつと勢いよく体を起こす。

夢か…

朱奈は時計に目をやる。

まだ朝の5時前。

他の三人はまだ寝てる。

田中の存在を確認すると何故かホツとした。

「ウヒヒヒ…」

和氣が気のない笑いを漏らす。

「寝言か…夢の中でもバカなことをしているのか…まったく」

朱奈がこの部屋に来てから一週間が経った。あつという間だった。

世界は知らないことだらけで楽しいことだらけで、自分が普通の女の子に産まれたら、どれほど幸せだっただろう。

朱奈はここに来てから何度もそんなことを考えている。

毎朝皆で朝食を食べ、皆を見送り、皆が帰ってきたらどこか出かけたり、テレビを見たり、光から借りたゲームをしたり、談笑したり、皆で笑って毎日が終われる。

この一週間幸せだった。

いつまで続くのだろうかこの関係は。できるならこのまま…

一週間も経つといろいろわかってくるものがある。

徳子や光はまだ良く解らないが、良い人間であることは疑いようがない。

香は変な趣味は置いといて、面白い。

最初はホワイトボードの会話もめんどくさかったが今はもう慣れた。阿部は無口だが優しく、良いヤツだ。

和氣は最初、バカなヤツだなと思っていたが、いつも笑っていて不気味な感じを出している。

田中は正直わからない。この男はあの人に似ている。
だからわからない。

解るのは、三人が三人とも何か私に隠していることは解る。
三人で一つのことを隠そうとしているのではない。

三人が三人それぞれ私に何かを隠している。

まあ、私もコイツ等に隠し事をしているからどっこいどっこいだ
がな…

そんな事を思いながら、ふと外を見る。

雨が降っていた。

寒気を朱奈は感じた。10月中頃の朝は冬ほどではないが、寒い。

だが、この寒気はその寒さだけではなかった。

震えが止まらない。ベッドにまた入るが一向に震えが止まる気配はない。

震えを止める方法はないかと模索していると一つ明暗を思い付いた。
少し不謹慎だが仕方ないだろう。

夢を見えていた。

とてもとても幸せな夢。

こんな夢みるのは初めてだな。

とか夢の中で言ってみる。

田中は目覚ましの音で目を覚ます。

他の三人も覚まし始める。

そして異変に気づく。田中の布団の中にはなんと田中と抱きつく状態
で朱奈が寝ているのだ。

「なっ!?!」

驚く田中。

しかし他の二人は冷静な反応。

「おいおい、いくら年頃の男女が同じ屋根の下暮らしているからって、一週間はちょっと早すぎるんじゃないか？」

和気は眠そうな顔で、だがどこか楽しそうな顔をする。

「俺はそろそろそうなるんじゃないかと思っていた」

阿部はまるで理解ある父親のような顔をしている。

「ちよつと待て、お前等！これは違うぞ！俺は何もしてないぞ！」

田中は二人に反論。

朱奈は田中の隣でスヤスヤと寝ている。

「おーおー。ここまできて言い逃れたあ、器が小さいぞ。ロリコン。」

「

「お前に言われたくねえよ！変態！」

「責任とれよ。ロリコン……」

「あつ、阿部まで！？」

「うゝん。何だ朝から五月蠅いぞ。」

ここで朱奈がやっと起床。

「てめえ何で俺のフトンの中眠ってやがる！どうゆうことだ！」

「む？」

朱奈は眠たそうに目をこすっている。

「おいおい、未来のお妃をてめえなんてよぶなよな。仲良くなれよ

ロリコン。」

「仲睦まじくな、ロリコン……」

和気と阿部は遠くから遠い目をしながら二人を観察している。

「俺をロリコンって呼ぶな！」

「ロリコンとは何なのだ。」

朱奈はまだどこか眠そうだ。

「ロリコンってのはなお前みたいな幼児体型が……」

「わー！わーわー！！」

田中は大声を出し説明しようとする和気を遮る。

「てゆうか、お前！何でここで寝てるんだあ！びっくりしたじゃねえか！」

「本当は嬉しかったんだろ、ロリコン」

いつまでも突っかかってくる和気を田中は黙らせる。

「昨日は寒かったからな。温かい田中の所で寝ようと思ったのだ。邪魔だったか？」

うつと田中は黙る。

邪魔どころか逆に心地良かったのである。初めて気持ちの良い夢を見れた気がするし、答に詰まる田中。

そんな田中に追い討ち。

「ロリコンロリコンロリコンロリコンロリコンロリコンロリコンロリコン」

和気と阿部のロリコンコール。

「ブックロス！」

「待て！お前が言うとかマジにしか聞こえ…ぎやややや…！！」

二人を黙らし、朱奈の所に戻る田中。

「邪魔ってわけじゃねえけど、やっぱり俺も男だろ…なあ…こうゆうのはなあ」

「うむ！さすがに不謹慎だとは思ったのだが…邪魔にならずに済んでよかった。」

「いや…あ…うん…そうだな。あ、あははははは。」

田中はあの日から妙に朱奈になつかれている。まるで親に甘えるように田中に甘えてくるのだ。

やりにくい…

田中は誰かからこんなにもなつかれた経験がないため朱奈への対応がまるでわからない。

そんな二人を見て和気と阿部が田中につけたあだ名がロリコン。

朱奈はあくまで田中達と同年代。

しかし、その背丈と容姿があまりにも幼くみえるのだ。

それを言っただけ和気は朱奈にぼこぼこにされていたので田中も阿部も

それには触れない。

代わりに田中にその矛先が移ったわけだが…。

この一週間で朱奈は変わった。

田中との買物には良く付いてくるようになったし、朝食や夕飯などの手伝いもするようになった。

周りにも馴染めてきたようで良く笑うようになった。

「どうだ？私の焼いたベーコンは旨いか？」

朝食時に朱奈の明るい声が響く。

住吉荘の皆は答の代わりにベーコンをすぐに箸を伸ばし、むしゃむしゃと食べ、あっという間にベーコンは皿の上から姿を消す。

「少ししょっぱいけど旨いよ。」

徳子は笑顔を向けながら朱奈に答えた。

朱奈は顔を輝かせ、田中にも同じ質問をする。

「あ、ああ。旨いぞ。」

朱奈はさらに顔を輝かせ、ご飯を食べ始める。

朱奈が焼いたベーコンは正直言って味が濃すぎる。

それでも皆我慢して残さず食べるのは朱奈をがっかりさせないためだから今日も異常な塩味と喉の渇きと戦いながら朱奈に笑顔を向ける。

朱奈は何も知らずに笑っている。

住吉荘をでて、四人で登校。

いつもと変わらぬ風景。

しかし、以前の四人とはどこか違っていた。

「ひいゝ。今日は一段と凄かったなゝ。おい」
和気は何時もとかわらず半分笑いながら、他の三人にしゃべりかける。

「ム…」

阿部はただ黙り、香は俯く。

「つーか、お前がどうにかしろよ。ロリコン」

「ロリコンじゃねえよ」

朝から無理をしたせいで田中を含む四人は余り元気がない。

「いいのかあ？このまま行ったら毎日あれ食うことになるんだぜ。
お前は一生な…お嬢さん。」

「勝手に変なあだ名つけんなよ。後で殺すぞ。」

「お嬢さんってどうゆうことですか？田中さんっ」
いきなり後ろから元気な声が聞こえてくる。

四人とも突然の気配に驚く。

その声の主は桐島 美鈴二年生。

四人の先輩であると同時に田中にとっては師匠のようなもの、他の三人にとってはお姉さんの存在。

その姿は見るからに大和撫子。

黒髪の長髪は綺麗にまっすぐで、透き通るような白い肌で、マリアとは違う意味で思わず振り返ってしまうような美貌。
そんな顔に笑みを浮かべて、優しく質問する。

「お嬢さんとはどういう事なのですか？田中さん。」
付き合いの長い田中には解る。

この空気はヤバいということに。

何て答えればいいのか…

田中はそんな事を考えながら、空を見上げる。
少し肌寒い、朝の出来事だった。

EP 1 - 6 桐島 美鈴

「お嬢さんとはどういう事なのですか？田中さん。」

突然田中達の前に現れた桐島 美鈴。

笑ってる。

でも、笑ってない。

内面的な所が笑ってない。

「いや…それはコイツラが勝手に」

田中は本当の事を言う。

あくまで朱奈のことは隠しておきながらだが…

この人は自分達をまるで弟の様に思っているらしく、田中達の色恋沙汰の様な噂を聞けば、毎回過剰に反応するような人だ。特に田中に対してのその反応は少し異常な気がしてくる。

よって田中にとって今の状況は芳しくない。

田中はめんどくさい事態になる前に誤解を解いておきたかった。

しかし、ここにはバカがいた。

「おいおい。嘘は良くないよ。田中く〜ん」

バカ（和気）はまるでオモチャを与えられた子供の様な笑顔を見せ、こちらを見てくる。

田中は一瞬で理解。

コイツ…

和気を睨む。

和気はより一層笑みを深くする。

「田中ったら最近、ちよつと訳有りの…ぶべらっ…！」

途中で和気の言葉は途切れる。

簡単な話、田中が全力で和気のみぞに拳をお見舞いしてやったのだ。余りの衝撃に気絶する和気。

「どうしたー和氣！ たつ、大変だー。意識がないぞ（棒読み）」
田中は袈裟に驚いてみせる。

「すみません。桐島さん。何か和氣の意識が無いんで、急いで保健室に運ばなきゃ！ では、失礼します。」

田中は和氣を抱え、急いで去っていく。

その後ろを阿部が追いかけていき。

香も付いていこうとするが、美鈴に襟を捕まれる。

振り替える香に

「少し理解できない部分があるので、状況を教えてはくれませんか？ 香さん」

笑っている。

けど、笑ってない。

香は助けを求めようと田中達の方を見る。

二人は遠くからまるで死地に送り込んだ兵士に送るが如く敬礼を香に送っていた。

田中はわかっていた。

美鈴は田中達にのけ者にされるのが嫌いなことを。

そしてのけ者にされると、決まって事情を気弱な香から聞き出そうとすることを。

今まで経験から田中はわかっていたのだ。

しかも、香は部屋が違うため、詳しい事情は知らない。何故田中がロリコンなどと呼ばれているのかなんて解るはずかない。

更に更に、朱奈はあの一色家の人間で命を狙われているという話なので、周りの人には他言無用と釘を刺している。

故に、香は何も話すことができない。

田中はわかっていた。誰かが犠牲ならなければ美鈴からの追及から逃れられないことに。

グッド・ラック！ 香…

香は助けがこないことを瞬時に理解。ついでに田中に利用されたことも理解。

美鈴に少し抵抗しつつ持参のホワイトボードになにやら書いている。
『私も和氣君のことが心配なので行かなきゃ。』
と書かれている。

「あら。まったく、香さん。私言いましたよね。何かを伝えたいならちゃんと相手の目を見て、言葉で伝えなさいって。」
優しく、まるで諭すように美鈴は笑っている。

けど、笑ってない。

香は逃げられそうになかった。

次の日。今日は土曜日で昨日の天気が嘘のような快晴。

しかし、そんな天気とは逆に田中は暗い。

その隣には相変わらず元気な朱奈。

二人は今住吉荘から二駅ほど離れた所にある街にあるとある事務所の前にいる。

とある事務所とは、例の通り暴力団事務所。この暴力団事務所はここら一体の事務所を実質上すべて支配するほどの力を有している事務所。

処理屋の田中といえど、あまり関わりたくない相手だった。

田中が暴力団という存在をしたのはいつ頃だろうか。

昔の頃の記憶はあまりないので思い出せない。

ただ、関わってはいけない相手。ぐらいいメージは持っている。

何故こんな所にいるのかと言うと、処理屋としての仕事。

この街のとある老夫婦の家に事務所の人間が来たのは数日前。

新しい事務所をこの辺に建てるため、この土地を譲ってくれというもの。

老夫婦はこれを拒否。

何せ長く二人で暮らしてきた家。そこら辺に大切な思い出が幾つも

ある大切な場所。

二人はこの家を失いたくはなかったからだ。しかし、事務所の人達
は一旦は退いたが、それからは陰湿な脅迫。それらに老夫婦は耐え
られなくなり、この問題をどうにか処理してくれと相談してきたの
が、一昨日。

そして今日田中達はその事務所と交渉しに行く予定だったのだが、
和気は田中のパンチが痛くて暫く動けないとだだをこね、香は昨日
の裏切りを恨んでいるらしく、部屋に閉じ籠り、阿部は別な仕事に
駆り出され、田中一人でくることになってしまったはずだった。

しかし、

「これが悪党の住み処か。うむ！では行くぞ田中！」

田中の隣には何故か朱奈。

老夫婦の話を聞いて、居てもたつてもいられずに付いてくると言い
出したのが昨日のこと。

「許せんではないか！私も付いていくぞ！田中！奴らをコテンパン
にするのだ。」

「いやいやいやいやいやい。お前解ってる？アイツらは…まあ
完全なるイメージだけどそういう奴らなんだよ。そんなのにいち
ち怒ってんじゃねえよ。それにお前は付いてんくな。危ねえぞ。も
しかしたら流血沙汰になるかもしれねえし」

「構わん。そうなれば田中が守ってくれるのだろう？それとも田中
はそんな小悪党に遅れをとると？」

「いや、それは無いけどさ…」

「なら、問答無用だな」

「……………」

そんなこんなで朱奈は付いてきた。

ただし、交渉中は一言も喋らないことを条件付きで。

散々朱奈は拒否したが、そうしなければ何をしだすかわからない。

はぁと深いため息を吐く。

そして朱奈を連れて、いざ事務所へ。

予想通りコヤツはひと悶着起こしやがるのである。

EP 1 - 7 眠れる…

処理屋とはあらゆる問題もあらゆる事件も合理的に且つ確実に処理することを目的とする仕事のこと、ポピュラーではないものの、数多くの処理屋が世界には存在する。

そのため、ある程度危険な仕事に携わっている者（裏の仕事など）などには処理屋の存在は認知されているだろう

ちなみに田中達の師匠的存在であるマリアは世界的に有名な処理屋で時には政府や国家がらみの重大な仕事などもこなす一流の処理屋。それに比べ田中達はまだ創設して実質一年にも満たない未熟な処理屋。

香のおかげである程度の仕事は入ってくるが、マリアのように世界的に有名なわけでもない。

三流どころか四流も危うい。

そんなペーパー丸出しな処理屋の交渉にこの街一帯を仕切る事務所が乗ってくるはずがないはずだが、事務所は交渉をする事を承諾。

理由は香のおかげ。

一昨日からこの事務所のことを調べていてくれていて、この事務所が様々な違法を暴いていったのだ。

昨日は怒っていたものの夜遅くまで事務所について調べてくれたし、資料を渡してくれた時には田中の身を心配してくれたりして、香は本当にいいやつなんだと改めて確認。

そんな彼女のことをあんな風に扱ってしまったことを今更ながら後悔する。

人間は後悔する生き物である。

どっかの本に書かれてたなあ。あれ？マリアさんが言ってたんだっけ？

何て考えながら朱奈を連れ事務所へ入る。

入り口近くの如何にも極道という男に要件を言って、少し待たされること数分。

三階の茶室のような場所に誘導される。

扉を開くとメガネをかけ、スーツ姿の男が待っていた。

実質上この事務所のトップらしい。入り口近くに居た男のような強さは感じさせないが、その目に宿る光からは危ない匂いがプンプンする。

さすがはトップ。

なんて思っただけで立っていると、

「どうぞお座りください」

なんてメガネ男の座っている椅子のテーブルを挟んだ反対側の三人用のソファに座る様に先導される。

何かこの時点で三流振りをかもしだしている田中だがそんなの問題ではない。

何故なら見かけだけなら中学一年生、下手したら小学生に見える少女を連れてくる時点で仕事なめてんのかって感じだからである。

メガネは名刺を差し出しながら丁寧に挨拶。

「私はこの阿久根事務所に所属している伊東 醍醐と申します。」

少し朱奈を気にしながら話を続ける。

「この度の要件はこちらの老夫婦への脅迫を止める代わりに我々が法を犯していることを黙認してくれるということですか……」

「その通りです。あなたの方にとってはデメリットはないはずですし、断つても良いことは何もありませんよ」

田中は内心ドキドキしていた。

交渉なんてやったことなんてないし、もし決裂すれば事務所の人間に襲われる危険まであるのだから。

田中一人なら無傷で逃げる事も可能だが、今回は朱奈がいる。

正直、嫌でも置いてくれば良かったと今更ながら後悔する。

「確かにこの情報は全て真実。ええ…認めましょう。ここで嘘をつく理由もないですしね。それより心配なのはあなたの方が本当に黙認

してくれるのかということですが」

「安心して下さい。こちらプロです。契約は守ります。」

「ふむ。なら断る理由はないですね」

といって契約書を持つてくるように部下に命令する伊東。

さらに持つてきた契約書にサインをする。

ここまでは順調。最終確認も終わり、今後あの老夫婦には危害も干渉も一切しないこれで終わるはずだった。

「お前！」

田中が相手方の契約書に穴がないか確認していると突然朱奈が伊東に向かって言い放つ。

「何だい？お嬢ちゃん。何か用かな？」

お前呼ばわりされたことなど意にも介せず、答える伊東。

そんな伊東に朱奈は語る。

「お前はちゃんとこの契約を守る気があるのか？」

「どうゆう意味だい？」

「私は正直、これではお前達が赦せない。無理矢理にでもあの二人に土下座させてやりたいくらいだ。」

最早田中の牽制でも朱奈は止まらない。変なスイッチが入ってしまったようだ。

「だが、お前達がもう二人に関わらないと言うなら、田中とあの二人の優しさに免じて赦す。しかし！お前達からは嘘しか感じられない！ふざけるのも大概しろ！下衆が！」

「あはは…まったく何を言い出すかと思えば…」

伊東はそれでも笑っている。

けど、笑ってない。

田中は瞬時に理解。

「餓鬼が！」

伊東は突然動き出す。懷に手を入れ、引き抜いた時には既に手には拳銃が握られている。田中は拳銃のことなど知らないが少し見ればその拳銃が高い殺傷力を持つていることは理解できた。

「！！」

朱奈突然の出来事に身体がついていかない様でまるで動けていない。そんな朱奈に凶悪な笑みを浮かべ、何の容赦もなく拳銃の引き金を引く。

田中は朱奈を弾丸から盾になる様に飛び付き朱奈を守る。

その背中にさらに弾丸がいくつもぶち込まれる。

その衝撃で部屋中央から端まで吹き飛ばされる。

朱奈は飛ばされた田中を目で追い、そして血だらけで倒れている田中に駆け寄り、泣きながら田中の名前を叫ぶ。

それを見ながら更に凶悪な笑みを深める伊東。

「まったく餓鬼がしゃしゃり出るからそうなるんだよ。可哀想な青年！彼一人ならこんなことにはならなかったろうに」

銃声を聞き、部下が四人扉を開け、入ってくる。

この状況を見ても一切驚かない。こんな状況は慣れっこなのだろう。

「死体は燃やせ。女は生きたまま監禁。容姿は中々だし、変態は沢山いるし、幾らでも高く売れるだろう。」

「りょーかい」

めんどくさそうに返事をしながら、田中達に近く四人。

朱奈は田中の名前を叫んでいる。

泣き叫ぶ朱奈を黙らそうと一人が朱奈に手を伸ばす。

しかし、その手は勢いよく弾かれる。

手を見ると、手は不自然な方向に曲がっている。

少し遅れて痛覚が反応。

激しい痛みのにたうち回る。

他の三人が床を転がり回る男から目を離し、朱奈のほうを見る。

朱奈は涙を流しながら一人の人物を見上げている。

立っているのは先程十何発もの銃弾を背中に受けた田中。

本来なら即死レベル。しかし、田中は立っていた。

超能力だと、他の三人はすぐに理解。

武器を取り出し、更に自慢の超能力を発動しようとする。

だが田中のほうが速かった。

瞬時に三人の懐に入り、屈強な男達を吹き飛ばしていく。

田中の体型からは想像できない力だ。

田中はチラリと朱奈のほうを見る。

思わず朱奈はゾクツとする。

田中の目には不気味な光が宿り、顔は朱奈が見たこともないほど残酷な笑みで顔を歪ませている。

田中ではない別人を朱奈は感じた。

田中は最初に腕を折り、痛みへのたうち回る男を気絶させ、伊東に迫る。

その時間四秒にも満たない。

「くっ！」

伊東は近づく田中に銃弾を撃ち込む。

しかし、銃弾は田中の身体にめり込みはするものの皮膚すら傷つけずに床に落ちる。

「ダメだな…その程度の殺意じゃ俺は殺せない…じゃあね。」

まるで子供のような無邪気な、しかし、残酷な笑顔で伊東の首に手をかける田中。

「悪かった。本当にあの老夫婦には何もしないから！ひっ！」

だんだんと手に力が込められてくる。

圧倒的な殺気に伊東は動けなくなる。

こんなはずではなかった…適当に契約したあとに老夫婦を殺し、あの土地を手に入れ新しい事務所を作って、更に勢力を広げて…

こんなはずではなかった。

伊東はもはや涙を流し、鼻水を流し顔には最初のクールな面影などどこにも残ってない。

そんな伊東を見て更に残酷な笑みを深める田中。

止めを刺そうとする田中の裾を朱奈が掴む。

「駄目だ！田中。やめてくれ！田中！」

朱奈の顔も涙でぐしゃぐしゃになっている。そんな朱奈の姿を少し振り返りながら田中は確認。

その目には不気味な光がまだ宿っているが伊東の首から手を離す。伊東は倒れながら、余りの恐怖に漏らしてしまう。

それを見て、田中はまるで何かを抑え込むように頭を抱えながら、伊東に忠告。

「あの老夫婦に手を出せば、次は殺す！」

単なる脅しには聞こえないマジな声に伊東はさらに縮み上がる。

「行くよ。朱奈。」

なりべく平静にそれでももってなるべく優しく朱奈に喋りかける。

事務所を出ると、まず持ってきたハンカチで朱奈の顔の涙を拭く。

また、やつちまったな…

何て思いながら朱奈の無事を確認し終わると、近くにあったベンチに座る。

銃弾を受けた背中が痛い、まずは心を落ち着ける。

一通り落ち着くと、改めて朱奈の無事を確認する。

「だから付いてくんなくていったんだよ。怖かったろ？」

「ごっ…ご免なさい。」

朱奈は素直に謝る。

少し震えている。

まあ無理もない…嫌なモノを見せてしまった。

また朱奈を連れてきたことを後悔する。

「ま、ケガがなくて良かったよ。ホント」

田中は朱奈を安心させようと朱奈の頭を撫でる。

最初はびくつとしたが、安心したのか田中に抱きつく。

すると朱奈は手に付いた温かいモノに気づく。

それを確認。

それは決して少なくはない血だった。

「田中！血が出ているぞ！」

「ああ…そんだな」

田中はまだ苦しそうに頭を抱えている。

「速く病院に行かなくては！死んでしまうぞ！速く！」

必死で促す朱奈を見て、田中の目にはまた不気味な光がちらついた。

EP 1 - 8 桐島家と一色家

夢を見ていた

非道い夢だった

昔の暗い暗い悪夢

外では雨が降っている

少年の身体には幾つもの衝撃が走り、連続する痛みで気絶すること
もできない。

もう限界だ

このままでは死んでしまう

気が付けば

少年は両親を殺していた

肌にまとわりつくようなじめじめとした雨の日の出来事

非道い夢だった

田中は目を冷ますと外では雨が降っているようだった。

背中が痛い。

ふと隣を見ると朱奈が無防備に眠っている。前回と同じように抱き
つく様に眠っている。

阿部は壁に寄り、腕を組みながら眠っている。

その光景に思わず田中は微笑む。

和気は相変わらずフトンの中でぐっすりといびきをかいている。

今日は日曜日。今日が学校の休みの日で本当に良かったと田中は思
う。

背中が痛い。でもいいが静かに一人で心を落ち着けていたい。

田中は昨日のあの後の事を思い出す。

「こりやすげえな……」

田中の背中を見て長谷川　一はそんな感想を述べる。

朱奈に医者に行くようにせがまれた田中は昔マリアが紹介してくれた医者の所に行った。田中も何度か利用したことがあるので長谷川　一とは顔見知り。

朱奈はフロントで待っている。

「は……肉体強化系の能力に感謝するんだな。普通なら即死レベルの量の銃弾だぞ。」

なんて言いながら体にめり込む銃弾を一つ一つ何喰わぬ顔でとりはじめる。

聞いた話によると一は昔裏の仕事でマリアのパートナーをしていた時期があるらしく。こんな傷を見ても何も言わず治療してくれる。

「この調子なら消毒して包帯巻いてもすぐに治るだろ。まったく一体何食ったらそんなになるんだか……ビスコか……ビスコなのか。あれで赤ちゃんでも凄く強く成れるもんな。」

なんて軽く冗談を言ってくる。

「ま、傷の事についてとやかく言う義理はねえし、てめえがどこで死のうと俺は関係ないけどよ……」

医者にあるまじき事を軽々と言つてのけやがったよコイツ。

「ああゆう真っ直ぐそうな女をそんな理由で不安がらせんなよ。」

うわぁ……臭いセリフなんて田中が思つて黙っていると、今ごろ恥ずかしいのか少し顔を赤らめる。

「何か反応しろよ！俺がメチャクチャイテェ存在じゃねえか！」
なんて言いながらも治療は終わる。

治療室から出て、フロントに戻ると朱な奈の姿を確認。

どうやら疲れてしまった様子でグスリと眠っている。

受付の看護婦さんからは何やらクスクスと笑われているような気が

する。

看護婦さん曰く治療を田中が受けてから、先程まで何もせずにと田中の無事を祈っていたらしい。

まあ、疲れて眠ってしまったようだ。

そんな朱奈の寝顔を見て、一さんが言ったことも満更ではないなと思う。

帰りは朱奈を起こさない様におんぶをしてゆっくりと帰る。

背中の温かい温度を感じながらゆっくりと。

住吉荘に帰ると今度は田中がばったんきゅ。

そのままこの時間まで眠っていたようだ。

田中の起きた気配を感じたのか阿部が目を覚ます。

「む…どうやら大丈夫そうだな」

「ああ…お陰様でな」

阿部は恐らく朱奈から話を聞いていたのか、田中の腹にキツい一撃を入れてくる。

田中はそれを特に抵抗すれことなく受け入れる。

「これで赦してやる…」

これだけ言って阿部はいつもの阿部に戻る。

軽く感謝する田中。

本当に昨日はヤバかった。下手したら朱奈を殺してしまっていたかもしれない。

「ケガはいいのか？」

突然寝たままの和気から声をかけられる。

どうやら起きていたようだ。

「少し痛むが問題ねえな」

「そうか…油断すんなよ」

和気と久しぶりにまともな話をした気がする。

「ああ…気を付けるよ」

「田中…？」

隣で寝ていた朱奈が目を覚ます。

「田中！ケガは大丈夫か？無事なんだな」

先程二人に既にされた質問を朱奈はする。

「ああ…問題ない。それよりお前は大丈夫か？」

すると、田中の話などカンペキ無視して田中に抱きつく。

「ホッ、ホントに無事なんだな！良かったあよ」

泣きじゃくり何時ものような言葉使いが無くなっている。

一通り泣き、落ち着くと朱奈は俯きながら田中に聞く。

「ヒグッ！田中…田中は私のことを怒って、ヒグッ！怒っているか？」

「は？」

「だっ、だって、私は無理にお前に付いて…それに、ヒグッ！約束まで破って、勝手な事して、田中にケガさせて」

「いや、別に怒る必要なんてねえよ。それにお前のお陰で助かったぐらいだ。ホントにあの時はヤバかったんだよ」

これは田中の本心。

恐らく、あそこで朱奈が田中を止めていなければ、大変な事になっていただろう。

「ホントか？」

「ああ…ホントだよ」

「ヒグッ！でっ、でもあの時の田中…まるで別人みたいで…怖くて別人。」

朱奈の言った喩えはまさしく正しい。

核心を得ていた。

「俺が嘘ついてる人に見えるかぁ？お前、嘘解るんだろ？」

田中は事務所での出来事を思い出す。

「いや、ついてない…」

「だろっ？」

するとまた朱奈は田中の胸の中で泣き始める。

その時呼び鈴が鳴る。阿部が出ていく。

おそろく、香か、光かな…

なんて思いながら朱奈を落ち着かせようとする。

すると、部屋に客人が入ってくる。

誰かな？

なんて軽い気持ちで顔を上げた田中は一瞬で緊張。

客人の名は桐島 美鈴。

今この状況で一番会いたくない人No.1。

「なんで、桐島さんが？」

「気になっちゃって直接来ちゃいました。それよりこれはどうゆう事ですか？田中さん」

「いや、これは…その」

「田中さん…」

田中は思わず正座する。

美鈴は優しく微笑む。

けど、笑ってない。

今の状況を見て、阿部と和気はこっそりと部屋を出ようとする。

「阿部さん。和気くん。こっちにいらっしやい…」

優しい…

けど、優しくない言葉で、命令系ではない言葉だが圧倒的な強制力を持って、二人にゆっくりと話しかける。

「二人にもちゃんと話を聞かないと。私が納得するまで…」

笑顔がこんなに怖いとは思わなかった。

「田中さん。先ず話を聞く前に一つ言っておきます。理由は知りま

せんが女の子を泣かせるなんて言語道断です。何が何でも女に涙を流させるなどあればと言ったはずですが」

「いや、これは…」

「言っただけです、理由は知らない。」

「はい。」

「よろしい。それでそちらは？」

「えと…」

田中は答に詰まる。

「貴様こそ何者だ」

朱奈は先程から会話を聞いていたようで、田中に抱きつきながら美鈴を睨む。

「とりあえず、田中さんから離れてくださいますか？」

「む？何故だ？」

「当たり前だろ…」

「田中が言うなら仕方がない」

少し名残惜しそうに手を離す。

が正座する田中の膝の上にドンと座る。

「あの…」

美鈴が少し困った顔をする。

田中は美鈴の困った顔を初めて見た気がした。

「名を名乗れ。」

「桐島 美鈴です」

「一色 朱奈だ」

まるで真逆の名乗り方。

お互いの性格が真逆であることをお互いに理解する。
そしてもう一つ。

「一色？」

「桐島？」

「どうゆうことだ！田中」

「どうゆうことですか？田中さん」

二人に同時に同じことを聞かれ、正直かなり怖い。

「え…と、悪い。俺も理解できないんだけど…」

「説明しよう！」

一瞬静かになる部屋にバカの声が高らかと響く。

「「黙れ」」

静かに一蹴。

泣く泣く黙る和気。

御愁傷様と和気に手を合わせる。

「理解は全く理解できませんが、何故格式高い一色家の方がこのような場所に？」

軽く住吉荘を貶される。

「ふんっ！我が一色家をそのように呼べる貴様はどうやら本当にあの桐島家の者か。一体桐島家の者が田中達とどうゆう関係だ？」

何かヤバい空気になっている。

この二人以外の男三人は黙るしかない。

「私はこのお三方の…そうですね、身内の様な関係です。」

「うわー、いつの間にそんな設定に？」

「ほう？私は身内どころか同棲までしているぞ」

これは同棲と呼ぶのだろうか？

てゆうか、いつの間に同棲なんて言葉覚えた！？

「田中さん。」

矛先は田中へ。

他の二人は田中に手を合わせる。

「今日、和気君や阿部さんを連れて家にいらっしゃってください。ミツチリと稽古をつけて差し上げます。」

「バカを言え！田中はケガをしておるのだぞ！今日は1日安静にするように医者に言われている。」

あ、ヤバい。

三人の顔が歪む。

「ケガ？」

と言って田中の方を見る朱奈。

その顔は既に女としてではなく一人の武道家の顔に変化している。

「ケガをしたのですか？田中さん」

笑ってる。

けど、笑ってない。

「いや、まあ…」

頭が上がらない。

「田中は暴力団の男から私を守ってくれたのだ」

まるで、自分のことのように語る朱奈。

しかし、三人の顔は更に引きつる。いつの間にか汗がでている。

「暴力団？ そのような者達に遅れをとったのは、我が一族の顔に泥を塗りたくるような事ですよ。三人共！今すぐ私の屋敷に来てください。やはりミツチリと稽古する必要があるみたいです。」

と言って、ニツコリと笑う。

クドイようだがもう一度言う。

笑ってる

けど、笑ってない

「朱奈さんも一緒にどうですか？ご馳走を用意しますよ？」

「いい…のか？」

はい、と頷く美鈴。

「私はあの一色家だぞ」

「貴女はどうやら少し家について誤解をしてるようですし、良い機会ですし、一緒に」

「うむ…さすがに私も貴様のことをイメージだけで判断してしまっただよ。軽率な判断を赦してくれ」

「いえいえ。まだ幼いのに礼儀もしっかりと出来ていて、どっかのバカとは違い、すばらしいですね」

先程から美鈴の言葉が少しキツくなってきた。

「私は幼くなんてないぞ！田中達と同年代だ！」
「へっ？」

今日二度目の困惑の顔を田中達は見ていた。

EP 1 - 9 桐島家の人達

今日は日曜日。

本来ならば田中は今日、休む日のはずだった。

桐島 美鈴の提案によりこれから桐島家で1日地獄の特訓。

マリアに救われた後、田中は桐島家に預けられていた時期がある。

なんでも、桐島家は昔から代々物凄く強い有名な一族らしく。

田中は中学生時代をこのような家で過ごしてきた。

それは、それは激しい修行の毎日。

肉は切れ、骨は折るの毎日を過ごす。

その家での田中の師の名前は桐島 隆辰。今年で64歳になる老人にして、美鈴のお祖父さん。

美鈴は田中にとって姉弟子のような存在になる。

中学を卒業すると同時にマリアが現れ、田中を住吉荘に強引に連れていき、そして、今の阿部や和気、香と出会い、処理屋を始めることになる。

そんな田中を心配したのか、ちよくちよく住吉荘に美鈴が来るようになり、他のメンバーと知り合う。

美鈴はいろいろと納得できなかったのか、他の三人を桐島家に招待。美鈴はそこで三人と腕試しという名のデスマッチ。

美鈴はそれから度々来ては皆を強制的に桐島家に招待しては、修行という名のデスマッチ。

そんなこんなで先程のメンバーに香を混ぜた六人の内美鈴以外の全

ての者の足どりは重い。

先程、部屋に突然美鈴が現れ、強制的に家に招待された香の目は半泣きだったのを田中は思い出す。

その香は美鈴に半ば引きずられながら歩いている。

その美鈴の顔は笑顔。

悪い人じゃないんだけどな…

田中はそんな光景を見て、苦笑しながらそんなことを思う。

美鈴に悪気はないし、実際美鈴は優しく、いつも皆のことを一番に考えてくれる。

皆もそれを知っているから、美鈴のことをなんだかんだ言って好んでいる。

美鈴はただ嬉しいのだと思う。

美鈴はその美貌と優しさと頭の良さに学校では皆に一目おかれている存在。

ゆえに美鈴は孤独を感じていた。

皆美鈴のことを一步下がって見ているのである。

そんな中でできた遠慮の要らない存在が嬉しくて嬉しくてしょうがないのだ。

だから美鈴はこの四人からのけ者にされることを何よりも嫌う。

別々に暮らしていることも納得できないようで、この一年間散々四人に桐島家で暮らさないかと聞いてくる。

しかし、住吉荘に住むことはマリアの決定でどうすることも四人にはできないし、四人も住吉荘を出る気がない。

それを感じた美鈴は更に住吉荘に来るようになった。

そんなことを思い出していた田中は隣の朱奈の顔がいつもより暗いことに気づく。

「大丈夫か？朱奈」

「うむ…少し緊張している。」

「緊張する必要なんかねえよ。皆基本いい人だし。」

それでも朱奈の顔は優れない。

「お前だけでも帰るか？」

「む！大丈夫だ！私は大丈夫。」

「てゆうか、何でそこまで桐島家のこと怖れてるわけ？」

「いや…兄上から桐島家の者達は危険だから関わるなと…」

「危険ねえ…」

確かに美鈴は強い。

あの阿部でさえ、美鈴と互角なのだ。

さらに、超能力で肉体強化した田中でさえも凌駕する。

しかし、基本良い人なので危険と言われてもいまいち田中にはピンと来ない。

「ま、お前が何かされたその時は俺が守ってやるよ」

「本当か！？」

途端に朱奈の顔が明るくなる。

「ああ…そんなときゃ、俺の名前を呼びな。それがヤクザだろうが、桐島家だろうが、何だろうがお前を守ってやるよ。」

朱奈を安心させるため少し演技染みながら語る田中。正直、桐島の人達と闘うのだけは嫌だが。

「……………」

朱奈は黙っている。

「オイ！せっかく俺がカッコつけてるのに、黙るって何？俺ただ痛いヤツみたいじゃん」

と言って朱奈の方を見る。

朱奈は田中の顔を見ている。

こんなことが前に有ったな

と思っていたと、朱奈の瞳が心無しか涙で濡れている気がする。

「ちよっ！どうした朱奈あ。泣くほどつまんなかったのか？俺シヨ

ツク！」

「……誓うか……」

「へっ？」

「その言葉、私に誓うか？」

今度は朱奈は俯いてしまう。

「あ、ああ……そんなんでよけりあ……幾らでも誓うぜ」

「そうか……なら安心だ……」

田中から俯いた朱奈の顔を良く見ることはできないが、笑っているように感じた。

桐島家は広く、和風で、まるで昔の貴族の家のようなイメージがある。

いつ来ても、その家の雰囲気には息を呑むばかりである。

美鈴が玄関を開け、只今と言うと、奥から一人の女性が出てきた。

「相変わらず、美しいですね……真美さん。」

その女性が姿を現すやいなや和気は軽やかな笑顔を見せながら、その女性に近づく。

「あらあら。誉めても何もでないわよ。」

そんな和気の振る舞いにもニコニコしながら対応する女性は桐島真美。

美鈴の母親である。

「てゆうか、お前大概の女性に言っていないか？」

阿部が静かにツッコむ。

「あら……私そんな事言われた覚えがありませんが……」

和気の後ろで母親譲りの笑顔で美鈴は和気に話しかける。

「む！私もだ」

田中の隣の朱奈も反応。

「悪いな、俺はガキには興味ないんだ…べばらっ！」

当然の如く二人に殴り飛ばされる和気。

「ご無沙汰してます。真美さん」

「あら、田中君たら。敬語は止めてよね。私達は家族みたいなもんでしょ」

「はは…。ありがとうございます。」

何てやり取りをしていると奥からもう一人駆けてくる。

それは田中の足に抱きつくと、田中を見上げる。

「お帰り、たーにい。」

「うん。ただいま、裕美子ちゃん」

田中の腰位までしかないその女の子は桐島 裕美子。

美鈴の妹。

「こらこら裕美子、それじゃ田中君が歩けないじゃない。迷惑かけちゃだめでしょ。」

真美が言うと、少し膨れて裕美子は手を離し、手を振りながら奥へと姿を消す。

「ゆっくりしてってね」

と言いながら、奥へと案内する。

居間に行くと、厳格そうな老人が一人座りながら新聞を読んでいた。その隣には裕美子が居る。

老人の名前は隆辰。

田中の師である。

「ご無沙汰してます。」

田中が挨拶すると視線を此方にチラリと向けて、それから朱奈をじっと見つめる。

朱奈は思わず田中の裏に隠れる。

「おじいちゃん。こちらは…」

美鈴の言葉は隆辰によって制される。

隆辰は新聞を置いて、立ち上がり朱奈にゆっくりと向かって来る。

その顔は笑顔。

「そちらのお嬢ちゃんは一色家の子かい？」

隆辰は朱奈の視線までしゃがみ込んで優しく話す。

「そうだ。日本名は一色 朱奈と言う。」

「ようこそ。良く来たね。特に何も無いがゆつくりしてくと良い…」
その優しい声に少し安心したのか朱奈は頷く。

「お前達もよく来たな。ゆつくりしてくと良い。それとも久しぶりに儂と組むか？」

「いや…それは…」

「それはいいですね。私だけでは阿部さんと香さんだけで手一杯ですから、田中さんと和氣くんはおじいちゃんと組んでやりますか」
美鈴は嬉しそうに言う。

「じゃ、道場に行くか？悪いがお嬢ちゃんはこっちに残って裕美子の面倒見てやってくれないかい？」

朱奈は少し田中の方を見ると、力強く頷く。

それを見て、隆辰は思わず田中の頭をくしゃくしゃと激しく撫でる。

「一体いつの間にあんな良い娘惚れさせたんだ？オイ？」

「は？」

田中には隆辰の言ってる意味が解らなかった。

EP1-10 一色家

道場で組み手が終わり、かいた大量の汗をシャワーですっきりさせた頃には4時を過ぎていた。

居間に戻ると残っていた朱奈と裕美子は肩を寄せ合いながら仲良くソファで寝ている。
見ていると何とも微笑ましい光景だ。

二人を見ながら隆辰は微笑むと、静かに田中達を別室の和室に招いた。

この和室もとても広く、隆辰のお気に入り部屋のらしい。

「さて、聞きたいことはいろんなあるが、何故お前達が一色家の人間と一緒に居るんだ？」

隆辰は和室に似合う木製のテーブルに座り、その隣に美鈴を座らせ、田中達を反対側に座らせると、単刀直入に聞いてきた。

田中達はお互いに視線を見合せ、隠しきれないことを理解。

田中が四人を代表していきさつを語り始める。

其を一通り聞き終えると隆辰は深い溜め息を着く。

「なるほど。マリアの仕業か…全く今でもあの女の考えることは解らん…まあ、それがアイツの良い所でもあるがな」

「ハ、ハハハハハハ。」

田中は苦笑しかできない。

「私はあの人は嫌いです。田中さんや他の皆を何時も危険な目に合わせてるんですから。」

美鈴はマリアの話が出た途端に不機嫌になる。

「ずっと気になってんすけど、一体桐島家と一色家はどのような関係なんすか？」

田中は隆辰に向かって真剣な顔で聞く。

すると、隆辰は少し複雑そうな顔をする。

「うゝむ。実際桐島家と一色家には何ら関係など無い。ぶつちやけ儂も一色家の人間を初めて見るしな。」

「へ？」

思わぬ答に事情を知らないモノはポカンとする。

「まあ、説明するとだな、田中達にはわざと教えなかったんだが、桐島家というのは元々古くから日本で栄えた殺しの一族じゃ。様々な裏の仕事をこなし、長い時間を懸けて磨かれた殺人術と進化した肉体を持っている特別な一族。裏の世界じゃ、昔は五大老と呼ばれる巨大な勢力の一つで、五大老は世界でもそれなりに有名な勢力として知られておる。」

いきなりのカミングアウトとスケールのデカさに正直ビビる田中達だが、どおりでこの家系は皆強いはずだと納得する部分もある。

「話しは変わり、一色家というのは、昔から神の扉を守ってきた一族で、本家はイギリス。一色というのは日本名にすぎない。まあ、本当の名を知ってる者のほうが少ないがな。」

カミサマ？出たよ久しぶりの魔術設定。

田中達は改めて朱奈の言っていた魔術の存在が現実のものなんだと認識する。

隆辰がこんな顔で冗談なんて言うはずもない。

「てゆうか、神の扉ってなんすか？」

隆辰の話に割って入る和気。

「む？まあ、正確には神の扉を開くことができる宝玉だな…」

「宝玉？」

「そつ。宝玉。」

「人間は神になることは出来ません。それは絶対の真理です。しかし、人間はより近づこうと努力し、人間の限界に挑戦してきました。」

捕捉するように美鈴が語り始める。

「魔術もその可能性の一つですし、超能力もその一つ。しかし、人

間は神にはなれない。しかし、大昔に四人の賢者がその真理を砕き、神の道を切り開く神宝を4つ造り出した。だが四人の賢者はその宝の力を恐れ、封印した。その四人の子孫の一つが一色家というわけですよ。」

「つか、何でそれで神に為らなかったの？」

和氣が質問する。

「神宝はあくまでも神の道を切り開く宝。それで神になれる訳ではありません。それに人間は元々罪深き生き物です。その昔神の言い付けを破り、地上に落とされた者。そんな人間が神の道を開けば、たちまち神の逆鱗に触れることになるでしょう。まあ、それでもその宝を欲する人間はたくさん居るわけですが、一色家とはそんな偉大なる宝を護る一族。私たち殺しの桐島家を警戒するのは当たり前なんです。」

なるほど、恐らく朱奈は桐島家が恐ろしい殺しの一族だと教えられていたのだろう。

ゆえにあの反応。

「因みに、師匠達は殺人なんかしてるんですか？」

田中は一応の確認。

「僕はした事はある。しかし、殺しの一族は僕の代で引退した。美鈴は確かに一族のあらゆる技術を継承しておるが、人殺しなどしておらん。僕が断じてさせたくない。それに五大老なんて過去の異物じゃ、今ではそう呼ばれた5つの一族は衰退して、裏の世界でも大した力なんぞ持つとらんしな。」

隆辰は苦笑しながら語る。

しかし、その顔にはどこか苦いモノを嚙んだような顔をしていた。

「ま、お前達も大変な仕事を引き受けたモンだが、精一杯がんばれよな。」

「た、確かに。そう聞くとアイツってすげえ奴らに命狙われてるんじゃないね？」

和氣がどこか面白そうに軽く言う。

「ま、どうにかするさ…」

田中は適当に答える。

朱奈が一体誰にしろ、護るだけ。

俺はもう誓ったんだから。

「まあ、暗い話はそこら辺にして、晩御飯にしましょ。朱奈ちゃんに約束してますしね。」

美鈴はそんな事を言って、席を立ち、部屋から出ていく。

其々が様々な事を思いながら時間は過ぎてゆく。

時間は夜の10時を越えていた。

朱奈は桐島家で豪華な夕飯を頂き、目を輝かせ、田中達や美鈴と話し、どうやら楽しい時間を過ごせたようだ。

そんな姫様は今田中の背中でお休み中。

疲れてしまったとは言え寝てしまふとは、どうやら朱奈の桐島家に対する警戒は無くなったようだ。

そんな寝顔を見て、微笑んでいると、和氣がコチヲをニヤニヤしながら見つめていることに気づく。

「おやおや、朱奈の寝顔を見て萌えてる所を見ると、いよいよ本当にロリコンに目覚めたか？」

「萌えてねえよ！てゆうか、てめえはあくまで俺をロリコンキャラにする気なのか」

「そっちの方がおもしろくね？」

「お前：後でぶっ飛ばしてやるから覚悟しとけよな。オイ」

そんな二人を見ながら香はふと空を見上げる。
空には月がひっそりと輝いていた。

EP 1 - 1 1 拉致

全ての準備は揃った。

アイツらは絶対にゆるさねえ。

アイツラに後悔させてやる。

俺の顔に泥を塗った事を。

全ての準備は揃った。

先ずはあの餓鬼だ。

桐島家訪問以来、朱奈は更に田中になつくようになった。

なるべく田中と一緒にいるようにしているし、田中の言うことは比較的他の連中より大人しく聞くようになった。

朱奈は田中与過ごす時間を何よりも楽しむ様になった。まるで、楽しい思い出を沢山創るように。

朱奈の存在は田中達にとっても次第に大きな存在に成りつつあり、田中達でさえ会話をしたことのない、あの香も最近になり、朱奈と言葉で喋るようになっていた。

そのことは素直に田中達や光、徳子を驚かせた。

共同フロアの食卓テーブルの田中の席の隣は今や完全に朱奈の特等席。そのことも住吉荘の住人にとっては最早当たり前。

逆に居ないほうが違和感を感じるほどになっている。

「む。」

「どうしたんだ？朱奈？」

朝食を食べ始めてから、ずっと朱奈は考えるように腕組みをして、唸っていた。

「私も学校に行きたい。」

「は...？」

ずっと考えている割に随分軽い事に田中は少し驚く。

「だって、学校に行っている間は私は一人で昼間の時間を過ごさねば成らぬのだぞ。それに、光から借りた青春マンガには学校生活こそ最高の思い出のように描かれている。私だって、学校で青春したい。」

「お前な…学校での良い事ばかりじゃねえぞ。授業は面倒だし、テストは疲れるし、三年になれば、受験だってある。考えただけで憂鬱だったの…」

「だって、暇なんだもん。」

「本音はそれかよ。」

「昼間は私は一人なんだぞ！ゲームも漫画も一通り完破してしまっ
たし、その間私はなんて無防備…あっ！そうだ田中！私は昼間は無
防備だ。私の護衛として、それは頂けないだろ？」

「うるせー。第一この仕事が来て以来、お前を狙った襲撃らしいものも無いし、本当に命狙われてんのかって感じなんだけど。」

朱奈がこの住吉荘に来て、1ヶ月。

朱奈を狙った襲撃は一度もなく、田中達は最初に想定していたような闘いも一切ない。

マリアは一向に帰って来ない。

てゆうか、この仕事に終わりが有るのか、報酬そのものも有るのか、疑問になってきている。

「ほっ！本当だぞ！」

「じゃ、いい加減誰に命狙われてんのか教えろや。オイ」

「…………それは言えない。」

今までも、朱奈について朱奈に聞いても、朱奈はそれは言えない。の一点ばり。

朱が特別な一族だったことも隆辰に聞いて、初めて知った位だ。いい加減自分達を信用しても良いと思うんだけどな。

なんて、田中はぼんやり思う。

どうやら朱奈はマリアに口止めされているようだった。

つか、何時になったらマリアは帰ってくんだよ。

朝の時間を朱奈や和氣と過ごし、時間が来たので、朱奈を置いて、学校へ四人は出発する。

「あゝあ。学校なんて憂鬱だゝ！」

和氣が意味も無く叫ぶ。

「うるせえよ」

田中は軽くツッコむ。

「てゆうか、出会いが無いんだよね。普通学校っていうのはさ、出会いがあつてこそその学校なんだよ。俺は憂鬱な授業を受ける為に学校に行ってるやけじゃねえんだよ。あゝあ、出会いが欲しい。」

「てめえは、もし出会いがあつても、直ぐに一蹴されそうだけだな
……」

「うるせえよ！全く皆俺のことをバカバカ言いやがつて、やすがに俺だつて傷つくぞ！」

そんな事を言っている和氣を置いて、三人はさっさと先に行つてしまふ。

そんな三人の後ろ姿を見る和氣。

「あゝあ。憂鬱だな。オイ。」

「田中さんっ」

田中が購買に行こうと廊下を歩いていると、後ろから聞き慣れた声が呼び止める。

「うゝす。何か用すか？美鈴さん。」

田中は先程の授業を寝て、過ごしていた為体が少しダルい。

「用が無ければ話しかけてはいけないんですか？」

美鈴は笑っているが、何処と無く拗ねている様に感じる。

「いや…そうゆう訳ではないけどさ…」

「なら良かった。あつ！そうそう。朱奈ちゃんとは仲良くやっていきますか？また、泣かしたりしてないですよね」

「ああ、順調ですよ。順調過ぎる位ですよ。」

「そうなんですか。それは良かったですね。家の妹も朱奈ちゃんを気にいった様で、宜しければ、また皆さんで家に来ませんか？」

「あゝ…また、今度の機会に…」

「田中さん、何だか冷たくなりましたね。」

「へ？」

「昔の方がずっと優しくかった。もしかして私の事が嫌いになってしまったんですか…」

そう言つて俯く美鈴。

「いやいや！まさか、俺が美鈴さんを嫌いになるなんてあり得ませんよ。美鈴さんには感謝してますし、こんな綺麗な人を嫌いになるはずないですよ。」

田中は反射的にフォローを入れる。

「じゃあ、私の事好きですか？」

「へ？」

「好きですか？」

美鈴にズイツと見上げられる。

「まあ、好きですよ…」

「まあ！田中さんたらっ」

なんて言いながら廊下の角に美鈴は姿を消す。

一体何だったんだ…

放課後。退屈な授業が終わり、田中は今一人で商店街に居る。

勿論、友達が居ない可哀想なヤツではなく、晩御飯の食材を買いに

来たのだ。

今日の飯は何にしようかな…

まるで、主婦みたいな事を考えてながら商店街を歩く。

そうしていると、田中は自然と朝の朱奈を思い出す。

暇で暇でしようがないと言っていた。

田中は住吉荘でぶすつとして寝転がっている朱奈を想像して、微笑む。

今日は久しぶりに鍋にでもするかな…

時期はもう11月。

暖かい鍋は冷えた体に染み渡るだろうし、鍋は楽しいし、中々のチヨイスだろう。

そんなこんなで鍋の材料を買っていると、途中で和気と阿部と出会い、合流。

和気は鍋にバカみたいにはしゃぎ、阿部は静かに喜んだ。

三人が住吉荘に帰る頃には5時を過ぎていた

三人は住吉荘に近づくと、ふと違和感を感じた。

何時もは田中達が住吉荘に来ると、待ってましたとばかりに朱奈は走り寄ってくるはずなのである。

寝ているという可能性もあるが、不思議と三人にその考えは浮かばなかった。

妙に静かなのである。もはや、人の気配すらない。

妙な不安感に三人は直ぐに朱奈がいるはずの自分達の部屋に行ってみる。

扉を開くと、

そこには朱奈の姿は何処にもなかった。

部屋はまるで数人の人間が荒らしたようになっていた。

誰かが来て、抵抗する朱奈を連れ去ったのは明白。
一体誰が？

しかし、田中達は朱奈から何も教えられていないためどうしようも無い。

『御機嫌よう。田中さん。』

突然部屋にまるでスピーカーから聞こえるように突然声が響く。

『私のことは覚えているかな？伊東 醍醐だよ』

その名前を聞き、田中はぼんやりとその声の主がいつぞやの事務所
の男だと思い出す。

「一体何が目的だ」

田中は周りを警戒しながら、大声で叫ぶ。

『あの時の生意気な餓鬼はコチラで預かっている。返して欲しければ、9時に読裏廃ビルに一人で来ることだ。それまでは餓鬼には何もしない。今度は本当だよ。では、サラバだ。』

そこで声は完全に途切れる。

「くそっ」

田中は壁を叩きながら、部屋を出ようとする。

その肩を阿部が止める。

「オイ！離せよ！速く助けに行かねえと…」

そこで阿部に殴られる。

「阿部！何すんだよ！」

しりもちをつきながら田中は阿部を睨む。

「少し落ち着け。」

阿部はただ静かに言う。

「そうだが、田中よ。そんなんじゃ救えるヤツも救えなくなるぞ。」

「っ！」

「恐らくさっきの声は空間に声を録音する超能力の一種だろう。田中の質問にも答えなかったしな。そしてヤツ等の目的は朱奈でも無いな。そうだったら俺たちに猶予なんて与えるはずがねえ。恐らく、

お前にプライドを傷つけられた復讐って所か」

和気は何時もとは違い真剣な表情で分析していく。

「じゃあ、俺が行ってヤツ等を倒して、朱奈を助けてやれば、万事解決じゃねえかよ！」

「だから、落ち着けて。ヤツ等はお前に確実に復讐するために相応念入りに準備するだろう。お前が一人で何の作戦もなく突っ込んで行ったら、お前はともかく朱奈に身の危険が及ぶかもしれない。

先ず第一に考えるのは朱奈の安全だろ？それに時間までは猶予があるし、俺達には優秀な情報屋がいるだろ。だから落ち着け。」

「じゃあ、どうすんだよ。」

ある程度落ち着きを取り戻した田中が和気に問いかける。

「よしっ！香を大至急読んで、作戦会議を開こう。そして万全の状態でアイツを助けに行くぞ。」

こうして、朱奈救出大作戦は始まった。

EP 1 - 12 救出

だから、私は言ったのだ…

朱奈はムスツとした顔でそんなことを考えていた。

朱奈は今良く解らない廃ビルの七階の広い部屋の中で柱に拘束された状態。

周りには何人もの黒ずくめに囲まれ、厳重に監視されている。

この廃ビルについて朱奈が知ってるのはこの建物が七階建てだということ。つまり、朱奈のいる階が最上階であり、その上は屋上となっている。

七階までの各階には合計で百人はくだらない人数の黒ずくめがいるのを階段を上がるときに朱奈は見ている。

もし、侵入者が来たらあつという間に蜂の巣にされるだろう。

…しかし、見渡す限り黒ずくめ。

この組織はこの黒い服に何らかのポリシーの様なモノでも持っているのか？つてぐらい皆黒ずくめ。

随分とベタな。

なんて朱奈が考えていると、朱奈の前に一人の男が現れる。

伊東 醍醐。

この騒動の黒幕。朱奈はこれが自分を狙った犯行では無いことがこのビルに来てすぐに理解した。

自分を狙った犯行ならここでこんな事をせず、直ぐに姿を消すはずだ。

更に、この男は簡単にこの犯行の目的をしゃべった。

目的は復讐。

自分のプライドをへし折った田中と朱奈に対する報復。

未だに朱奈に拘束する以外には何の危害を加えないのは、単に田中

が目の前で殺されるのを見せつけるため。
その為だけにこれだけの人数と手間を尽くしたのだから凄いと言う
か、バカらしいと言うか。

取り敢えず、伊東は狂っていた。

あれから、復讐することしか考えずに生きていた。

その間の伊東はまるで何かに取り憑かれるようだったという。

この廃ビルは表通りからは遠く、人通りがまったくくない。

その為どれだけ暴れても、大概の音は街の騒音にかき消される。

約束の時間までまだ少しある。

伊東の目には怪しい光が宿っていた。

あと少し…あと少しで…

「怖い？ 餓鬼。」

伊東は余りの興奮を抑えるために朱奈に喋りかける。

でないと、どうにかなりそうなのだろう。

「特に感想は無いな。」

そんな伊東の様子を冷たい目で見る朱奈。

「こんな事をしても無駄だ。というか、こんな如何にも罨と言つて
るような所にこのこ助けにくると思つていいのか？ バカめ。来る
わけが無い。」

伊東は拘束されている朱奈の襟を掴んで醜い顔で睨みつける。

「来なければ、お前に全て償わせてやるよ…覚悟するんだな」

伊東は乱暴に襟を離し、部屋を出ていく。

そんな伊東の姿から目を離すと、朱奈は心の中でホッと胸を撫で下
ろしていた。

なんだかんだ言ってもまだ子供。こんな状況にいきなり晒されれば
不安になるのは当たり前だろう。

来るな…田中。

朱奈は心の中でそんな風に願っていた。

この人数だ。いくら田中といえども本当に殺されてしまったらう。
勝てたとしても、必ず重症を負う。

それだけは嫌だった。

自分のために死んでいった人を一度朱奈は見ている。

もうあんなことは嫌だった。

確かに、田中が助けに来ることも心のどこかで願っている。

それは人として仕方がないことだろう。

期待することが人間の本分なのだから。

田中は自分にとって今や大切な存在となっている。

何故こんなにも田中になついているのか、朱奈には解っていた。

似ているのだ、母上やあの人に。

顔とかではない。

内面的な部分で田中はどこか二人に似ていた。

そんな田中の姿に二人を映していたのだと思う。

最悪だな…

朱奈は自嘲する。

私は恐らく田中が好きなのではない。

二人を田中にただ映しているだけ。

そこに田中は居ない。

私は田中を利用しているだけ…

なんと醜いことか…

私なんて助ける価値もない。

でも、それでも、田中が助けに来ることを願ってしまう。

朱奈は少し泣きそうになった。

暫くすると部屋の扉が開き、伊東が帰ってくる。

「約束の時間だがヤツが現れた気配も、部下からの報告もない。裏切られたな餓鬼。」

その言葉に少し絶望するも、朱奈はホツとする。

そうだ。それでいい。

「仕方ない。この餓鬼で我慢するか。覚悟はできてるか？餓鬼。」
酷く冷たい声。

だが、朱奈は怯える様子を見せずに伊東を睨む。

伊東はそれをどう解釈したかは解らないが、ニヤリと顔を歪めた。
ガギン！！！！！！

その時天井から物凄い音が響いた。

丁度朱奈の上あたり。

ここは七階。

本来ならそこから来るはずがないと考え、伊東達は油断していた。

ガギン！！！！！！

もう一度音が響く。

朱奈の胸の音の速度が上がる。

ガギン！！！！！！

遂に天井にヒビが入る。

伊東達は想像以上の出来事に驚いている。

ガギン！！！！

そして遂に、轟音とともに天井の一部に穴があく。

朱奈の胸の音の速度は最高潮に達する。

あれだけ、来るなと願っていたのにもかかわらず、朱奈は砂ボコリで録に目も開けられない状態でも、その姿を探した。

朱奈は一人の男の姿を捕らえる。

その男は朱奈を護る様に立ちはだかり、左手には折れて、砕けた刀を持ち、もう片方の手は血だらけである。

本当に信じがたい事ではあるが、刀と素手でこのコンクリートの天井を突き破ったらしい。

その男は振り返り朱奈の姿を確認。

そして、朱奈の無事を確認する。

「よっ！助けに来たぜ。」

何喰わぬ笑顔で朱奈に喋りかける。

朱奈はそんな田中に救われた気がした。

「よっ！助けに来たぜ」

もうもうと立ち込める砂ボコリの中で朱奈に笑顔を向けながら安心させるように喋りかける田中。

その瞳から

その声から

その笑顔から

まるで田中から力が注ぎ込まれたように、朱奈の心に安堵感が広がる。

思わず田中の後ろに例二人の姿が写しだされる。

田中は朱奈を拘束していた鎖を素手で壊し、朱奈を解放する。

周りの黒ずくめ達は異常な出来事と、砂ボコリに無闇に動けずにいる。

集団でいることが逆に仇になってしまった。

解放された朱奈は田中に抱きつくこうとしたが、直ぐに止めた。

「馬鹿者！何故私のことなど助けに来たのだ！」

「あ！ああ！」

「見る！この状況を！この部屋だけではない。他のフロアにも田中を殺そうとする者達がたくさんいる！いくら田中でも殺されてしまっぞ」

「オイ、泣いてんのか？」

叫ぶ朱奈の顔を見ると、涙で濡れていた。

「今からでも、私を置いて逃げる！お前だけなら……」

朱奈の言葉は最後まで語られることはなかった。

田中が朱奈の頭に手を置き、朱奈の言葉をそつと止めたためである。「ごちゃごちゃうるせーよ。俺がこんな奴等に負けると思ってたのかよ？」

まただ…

また、田中から力をもらったかの様に胸に安堵感が広がる。
負けるわけがないと思わせてしまう。

「馬鹿者…。何故私なんかのために。」

「お前を護るのが、俺の仕事だからな！」

「……！」

その言葉に朱奈は前の二人とは別の新しい姿を田中に見た。

攻撃的な赤髪で、オールバックの髪型が特徴のぶっきらぼうな朱奈の幼なじみ。

そんな姿が田中の後ろに映った。

「バカだとか、逃げろだとかうるせー小言は後で幾らでも聞いてやる。だからそれまでてめえの意見は全部無視だ！俺はどうやってもお前を助けるぜ！」

田中の意思は固い。

今更朱奈が何と言おうとも下がる気はないのだろう。

朱奈は俯き、そんな田中の裾を掴む。

「じゃ、これだけは聞け。」

「あ？」

「死なないでくれ…！」

俯いていて田中からは見えないが今にも泣きそうな声だった。

「そうだな…それくらいなら聞いてやる」

「ハハハハ…感動の再開か？俺からしてもお前とは感動の再開だな。」

「

田中は伊東の声を聞いて、再び朱奈を護るように立ちはだかる。

「その餓鬼はもう用済みだな。俺の標的はお前なのだから。餓鬼が邪魔ならどこえなりと逃がすが良いさ。まあ、流れ弾が当たるとも限らないがな。」

「えゝ、マジで？じゃ、お言葉に甘えて…」

そう言うと、田中は朱奈の襟を掴む。

「なっ、何をする気なのだ？」

「ちょっと怖いかもしれないけど、我慢しろよな！」

そう言うと、田中は入ってきた時に開けた天井の穴に向かって朱奈をおもいつきりに投げ飛ばす。

「いやああああああああああ……！！！」

朱奈は天井を抜け、天井から更に十数メートル高くまで飛ばされる。上昇が終わり、重力の法則で朱奈は落ち始める。

まるでジェットコースターのフワツとした感覚が朱奈を襲う。

「ひやあああああああああ！」

またまっ逆さまに落ちていく朱奈を誰かがキャッチ。

余りの恐怖に涙目になりながら、その者を確認。

「よっ！元気そうじゃねーか。」

それは和気だった。

「和気……」

「思ったより重いな……お前。」

そんな和気に朱奈は蹴りを入れる。

「イッタァー。嘘に決まってるじゃんかよ。ま、こうしてお宝は手に入れた。では、田中君にご武運を！」

と言うと、和気は隣の近いビルに飛び移る。

「仲間か？」

伊東は田中を睨みながら静かに喋る。

他の黒ずくめも田中のことを見ていた。

「アンタ、前の時より大分印象変わったな。」

「そうかな？まあ、暫くの間は君を殺すことをばかりを考えていたよ。」

「そりゃ、御苦労様。」

それと同時に下で大爆発のような音がする。

一瞬、黒ずくめ達はそちらに意識を向けていまう。

その一瞬を田中は見逃さずに黒ずくめ達に向かって走り出す。その速度ははるかに人間を超えていた。

田中が有する超能力は『パワーシユーター肉体強化』

田中の精神状態により肉体を強化する能力。

凄じい時には弾丸も皮膚で弾かれ、コンクリートをも砕くほどの上昇率を誇る。

勿論、拳銃なんかでは、先ず当たらないし、当たったとしてもまず効かない。

次々と黒ずくめ達が倒れていく。

下の階でも戦闘音がしている。

手筈では、下で阿部が戦っているはずだ。

下と上の二人の化け物に伊東側の体制はガタガタになる。

中には超能力で戦う者もいるが、田中は長い間あの桐島家で修行していたため、ただのヤクザなんかでは敵にも為らない。

あつという間に人数が減っていく。

伊東の顔にはまたあの恐怖の顔をしていた。

伊東は余りの驚きに、部下を見捨てて、逃げようとする。

田中はそれに気づき、後ろから強烈な蹴りをお見舞いする。

伊東はガハッと息を一気にだして、数メートル飛び、壁にぶつかり悶える。

それから数分間。

伊東にとっては悪夢の様な時間を過ごした。

廃ビルからはいつの間にか戦闘音が消え、何時もの静寂がビルに横たわる。

「もう俺達には関わらない事だな。伊東さん。」

「うつ……！」

伊東は答えない。

俯いたまま、放心状態だ。

田中と阿部はそんな伊東から視線を外し、ビルから出る。

二人は暫く歩き、表通りに出る。

「田中！ 阿部！」

朱奈は二人を見ると、直ぐに走り出し、先ずは阿部に抱きつく。そして阿部が無傷なのを確認すると次は田中の無事を確認する。

二人の無事を確認して安心したのか朱奈は田中に抱きつき、泣き出してしまう。

そんな朱奈に困っていると、和気と香が近づいてくる。

「よっ！ どうやら死んでねーみてーだな！」

和気は相変わらずニヤニヤしている。

「てめえは相変わらずだな」

「いやいや… それほどでも。」

和気は相変わらずニヤニヤしている。

四人は朱奈が落ち着くまで待ち、取り敢えず住吉荘に帰ることにした。

泣いてる間ずっと朱奈は小言を言っていた。

それを田中達は適当に聞き流した。

そののほとんどが田中達の身を心配するものばかりだったからだ。

現在の時刻は22時を少し過ぎたころ。

駅に向かうと五人は歩きだそうすると朱奈はどうも力が入らないようで立てなくなっていた。

仕方ないので田中がおんぶする形で駅に向かう。

駅に向かう道では、朱奈の機嫌は良くなり、上機嫌に田中に話しかける。

「今日の田中はかつこよかったな！」

「かつこいい？」

「ああ！ まるで正義のヒーローのようだったぞ！」

「そっ、そうか？」

田中は朱奈のベタ褒めに照れたような、どこか驚いたような返答をしている。

「あっ、そうだ！」

そう言っていると、朱奈は田中の顔の横に顔を近づけ、田中の頬にキスをする。

「なっ！何してんだ！？お前！」

「取り敢えず、今の私はお金は一切持っていないくてな。これが今回の報酬だ！嬉しいか？」

「嬉しいわけではないだろうが！恥ずかしいわ！ボケ」

「ボケとは何だ！私は一色 朱奈だ」

「んな事は知ってるわ！」

そんなやり取りを後ろで楽しそうに和気は見ている。

「なんだ…中々お似合いじゃねえか…」

和気は空に浮かぶ月を見上げながら、静かにそう呟いた。

EP 1 - 14 予兆

「まったく。まだ若いのに朝からそんなんでどうする。若者よ。」

次の日の朝。

食卓を囲み、朝ごはんの納豆をかき混ぜながら徳子は田中に話す。

田中はまるで死んだ魚のような目をして、ボーッと遠くを見つめている。

田中は昨日、ビルの七階まで上り、コンクリートを砕き、五十人以上の人間を相手に戦った。

そりゃ疲労も溜まる。

上機嫌にご飯を食べる朱奈と疲れきっている田中を光は交互に見て、ニヤニヤする。

「さてはお二人さん。昨日ハリキリ過ぎたんじゃない？」

確かに田中は昨日ハリキリ過ぎた。

しかし、光が言っている意味はまるで違う意味であろう。

「いえ、特に何も無いッスよ。」

「えゝ？本当かな？」

わざとらしい笑み。

「朱奈ちゃん！昨日田中君と何かあったの？」

まるで、子供のような笑顔を振り撒く光。

「おおっ！聞いてくれるか、光。昨日の田中は凄かったんだぞ！」

朱奈は昨日の出来事を振り替えるかのように腕を組み、目を瞑る。
そして朱奈の答に光はますます顔を輝かせる。

「オイ！誤解を生むような言い方をすんじゃねーよ！何か話の方向が変な方に向かってんぞ」

疲れている田中は軽くツツコむ。

しかし、それでは甘いとはかりに和氣が話に乗ってくる。

「光さん。惑わされないください。コイツ確実に朱奈に手出しますよ。俺見たんすもん。拘束プレイなんてしちゃってさ、なんて白々しい」

「拘束プレイ！？まさか二人の関係がそんなに進展しているとは…この光にライバルあらわるか…」

光はわざとらしく目を細め、田中を見る。

「オイ！いい加減にしろやああ！」

田中は二人を黙らせる。

何時もの日常。

昨日は正直どうなる事かと不安で一杯だったが、四人の連携によりどうにか取り戻す事に成功した。

田中は自分がチームを組んでいて良かったと、今日、この光景を見て、そう思う。

おそらく、田中一人だったならば、無闇に突っ込んでしまい、この日常を取り戻せなかったかもしれない。

まあ、感謝の言葉など恥ずかしくて言えたモノじゃないが……特に和気には。

そんな事を考えながら、朝のニュースを見ると、朱奈が喋りかけてきた。

「田中。拘束プレイとは何だ？昨日確かに私は拘束されたが、あれを拘束プレイと言うのか？」

「……………」

近くでは和気と光が田中を見て、ニヤニヤしている。

今度は田中が黙る番だった。

キンコーン、カンコーン。

今日最後の授業終了のチャイムが鳴る。

田中は掃除の当番もなかったため、席を立ち、友達と軽い談笑をした後学校を後にしようとする。

「ほう……これが学校か。田中、やはり私も学校に行きたい！」

「そりゃあ、俺に言われても……って朱奈！何でこんな所に居るんだよ！？」

朱奈はまるで一体何に驚いているんだという顔をしている。

「光が連れて来てくれた。」

田中は言葉が出ない。

コイツは自分が命を狙われているという自覚がまるで無い。
こんな所に一人で居れば、殺し屋に殺してくれと言っているようなものだ。

光も光で何を考えているのか解らない。
てゆうか、何も考えて無いのかもしれない。

「ここが田中の通っている学校か。田中、案内してくれ」

「何言つてんだよ。生徒と関係者以外は立ち入り禁止なんだよ。つまり、お前は入れない。」

「なっ！何だと。それでは不公平ではないか！こうして見ることもできない者もいるのに！」

「とにかく、お前は入れないの」

そう言うと、朱奈はつまんなそうな顔をしながら学校に入断念。

そのまま、田中と一緒に住吉荘に帰る。

「あつ、朱奈。」

「どうした？」

「帰りに商店街に寄っていてもいいか？」

「何故寄るのだ？」

「んなもん、買い物のために決まってるだろうが。今日の朝冷蔵庫見たら、大分減ってきてたからな、そろそろ買わないとな」

「ん、なら拒否する理由はないな」

田中と朱奈は商店街に向かい、必要な物を買いはじめ。

「おい、朱奈。何か食いたいモンあるか？」

「む？ならば野菜カレーが食べたい。前に田中に作ってもらった野菜カレーはかなり旨かったからな。また食べたい。」

「お？野菜カレーか…。他の奴等の反応も中々良かったし、じゃ、今日は野菜カレーって事で。」

「やった〜！」

喜ぶ朱奈の姿を見て田中は思わず微笑む。

「まったく、まるでガキみたいだな…」

そんな事を思つて朱奈を見てみると、朱奈も田中の事をじつと見てきた。

「どうした？」

「いや、やっぱりお前の笑顔はいいな。なんか元気が出る。」

「そうかい。気がつかなかったぜ」

田中も正直朱奈の笑顔がどちらかというと好きになっていた。

あくまでライクである。ラブではない。

が、それは昨日の事件を通して、更に深まる。

でも、何時かは解らないが別れる時が来るのだろつ。

正直、その時は口惜しいが、ならば後悔の無いようにたくさん楽しい思い出を作れば良いじゃないか。なんて田中はふと考える時がある。

「よう。お前これから何処に行きたい場所あるか？」

そんな気持ちも有ってか、田中は珍しく朱奈にそんな事を聞く。

「む。何処かに行きたいのは山々なのだが、今日は天気予報で夕方に雨が降ると言っていたから、帰って住吉荘で田中と一緒に過ごすとうとうしよう。」

田中は空を見上げると、確かに空は今にも雨が降りそうな天気だった。

天気予報は当たり、田中達が住吉荘に帰る頃には小雨が降り始めていて、更にその強さを増している。

傘を持ってきていなかった田中と朱奈は住吉荘に帰る道を走っていた。

「てめえ！何で雨が降るってわかってて傘持ってきてねんだよ！こういう場合、普通傘持ってきてこねえ？」

「仕方なかるう！こんなに買い物長引くとは思わなかったんだから！」

「俺のせいってか？お前、毎日の献立考える主婦の苦しみ舐めんなよ！健康を気にしながら、毎日のおかずが被らないようにするのは大変なんだよ！ま、お前には一生わかんねえだろうがな！ガハハハ！」

そんな事を言いながら住吉荘に急ぐ。

あの門を曲がれば住吉荘まであと少し。

田中と朱奈の走るスピードも自然と速くなる。

その時

田中の世界は一回転した。

何も解らないまま、コンクリートの道路に叩きつけられる。

ガハッ！一体…何が？

「田中！」

朱奈の声がする。

何が起きたのか理解できないまま、朱奈の声の方に顔を向ける。

田中の所に走り寄ろうとする朱奈を遮るように一人の女性が立っていた。

モデル並みの身長とスペックを持つ、しなやかな体つき。

髪は黒髪で長い髪をポニーテールのように縛っている。

その右手には一本の傘。

自分が濡れているのにも関わらずに傘を持っていることから自分の傘では無いのだろう。

敵…か…

田中は自然とそう考え、立ち上がろうとする。

「エリ…」

朱奈はその女性の姿を見て、そう呟く。

エリと呼ばれた女性は朱奈に微笑みかけると傘を開き、朱奈に差し出す。

田中はその状況に混乱する。

味方なのか…じゃあ、なんで俺を攻撃したんだよ？

そんな状況を呑み込めない田中を更に混乱させるような言葉を発する。

「やっと見つけましたよ、朱奈様。助けにきました。もう、ご安心を。」

理解ができない。

一体どうなってるんだ？

小雨はその勢いを増し、田中の顔を痛いように叩きつけてきた。

EP 1 - 15 届かぬ手の先

雨が降っていた。

その勢いは少しずつ増し、その雨粒は田中の顔を痛いくらい打ちつけてくる。

「もう、ご安心ください。朱奈様。」

そう言つて女性は朱奈に傘を差し出す。

それを朱奈は震える手で傘を受けとる。

その目は驚きと恐怖で見開かれている。

田中はそんな朱奈の目を見て、その女性を敵だと判断する。

状況は理解できないが、朱奈が怯えている。それだけで田中が動くには十分だった。

田中は立ち上がり、女性に向かって走り出す。

頭がまだ混乱していて、超能力も本調子ではないが、それでもかなりの速さで女性との間を詰める。

そのまま田中は女性の顔に強烈な回し蹴りを放つ。

女性もその蹴りに反応をして腕をクロスさせそれをガード。

ドゴッ！！

つと鈍い衝撃音が鳴り、女性は数メートルほど後ろに飛ばされる。

「っー！」

女性は体制を整えると、田中を一度睨み、それから田中の後ろで果然としている朱奈を見てから、また田中を睨む。

女性はどうかやら自分の身の事よりも、朱奈のことが気になるようだ。

「だっ、駄目だ、田中！戦ってはいけない！」
「はっ？」

突然の田中の行動に呆然としていた朱奈は回し蹴りによる衝撃音で我を取り戻したのか、隣に朱奈を女性から守るように立つ田中の背中に叫ぶ。

その忠告に田中は思わず後ろを振り向く。

女性はその一瞬の隙を見逃さずに、田中と同じ位の速度で田中との間を詰め、田中と同じ様に回し蹴りを放つ。

反応が遅れた田中はガード仕切れず、まともに蹴りをくらい、後ろの朱奈を飛び越え、数メートルほど吹き飛ばされる。

「がっ！」

コンクリートの道路に叩きつけられた衝撃で田中は一瞬呼吸ができなくなる。

女性の蹴りは女が本来放つ事ができる、それどころか人間が放つ事ができる蹴りの威力を遥かに超えている。

おそらく田中と同じように何らかの力を持っているのだらうと田中は立ち上がりながら予測する。

「エリも止めてくれ！もう戦うな！」

今度は田中から守るように立つ女性の背中に叫ぶ朱奈。

「どうゆう事ですか？」

女性は振り向かず、田中から目を離さずに朱奈に質問する。
クールな女性の顔にも困惑の色が窺える。

「てめえ一体何者だよ!？」

しかし、状況を理解できないのは田中も同じで、女性に叫ぶ。

「私は…一色家近衛十隊、一番隊第三位、エリザード・テリエル。貴様こそ何者だ」

女性もとい、エリザードは田中を睨みながら答える。

「俺は、田中 太郎。処理屋をやっていて、コイツに護衛を頼まれているんだ。」

「護衛?…。ならば貴様は朱奈様を拐った誘拐犯では無いのですか?」

「誘…拐…?何だよそりゃ?」

田中もエリザードも全く今の状況を理解できない。
後ろの朱奈は何も語らず下を向いている。

「オイ!説明してくれよ朱奈!一体何がどうなってんだよ?」

田中の問いにも答えず、下を向いたまま。
完全なる沈黙。

激しい雨音だけがこの場を支配している。

「何をしている三位。」

その沈黙を破ったのは一人の男。

朱奈の三メートルほど後ろに何の前触れもなく突然現れる。

身長は178あたり、黒髪で、顔立ちは良く、かなりのイケメン。

どこことなく、朱奈に似ていて、黒いスーツに身を包む。

バサッ

とその男の後ろで傘を開く音がする。

気づけば、その男の後ろには身長は180を超え、赤髪でオールバック。目付きは悪く、小さい子供ならば、ただ見ただけで泣いてしまいそうな感じであるが、顔は整っていて、見た目は柄の悪いホストの様な姿で、こちらも黒いスーツに身を包んでいる男が立っていて、傘を前の男に傘をさしている。

「隊長！しっ、しかし、この者はどうやら朱奈様の身を保護してくれていた様子で…」

エリザードはその男の出現に明らかに動揺しているようで、先ほどのクールな姿はどこにもない。

「兄上…！」

朱奈もその男の出現に怯えているようだった。

「だが…その男が一連の騒動の主犯である女…マリアの関係者であることは解っている。これはどう説明するつもりだ？」

男は朱奈の姿を一度確認してからゆっくりと喋る。

その声は聞いた者を怯えさせる冷たい何かを秘めていた。

師匠が…朱奈を拐った？

ますます理解から遠退く田中。

「違うのです、兄上！私が…私が自分の意志で家を出たのです！」

「お前が？」

「はい…マリアはただ私に協力してくれただけで、この者も私が宿として使っていただけで、何も知りません。だから…」

朱奈の声は男によつて静かに止められる。

「解った。もういい…。この件に関しては不問とする。だが、お前にはそれなりの処置が必要となる。解るな？」

「はい…」

朱奈の声は雨の音にもかき消されてしまふほどに弱く成っていく。

「無駄な心配などかけさせるな…。お前は我が家の、世界の宝なのだという自覚をもつと持て。」

「はい…すみません…。」

「貴様」

突然男に呼ばれ、全く理解できないまま、次々と進んでいく状況に混乱していた田中はハッと意識を呼び戻される。

「この件に関して、貴様も不問とする。二度は言わぬから良く聞け、もう朱奈の事は忘れる。」

そう静かに言つて男はその場を去ろうとする。

赤髪の男はそれに従い、朱奈も何も言わずにエリザードに背中を押されながらその後ろに従う。

「まつ、待てよ、朱奈！解んねえよ！なんだよ！こんなサヨナラなのかよ！」

田中は手の届かぬ遠い場所に何も言わず行つてしまおうとする朱奈

に走り寄ろうとする。

その田中の叫びに朱奈の歩みも止まってしまふ。

少し遅れて先頭に行く男が走り寄る田中を振り向く。

「二度は言わぬと言った筈だ。」

「だっ、駄目です兄上！止めてください！」

男の殺気にいち速く反応し、止めようとする朱奈。

「朱奈にはもう関わるなと…。」

そんな朱奈の叫びの効果も無く、田中に静かに手を向けて、力を溜める。

「逃げろ！田中！！！」

無駄だと判断した朱奈は今度は田中に叫ぶ。

「っ！」

その叫びを無視して田中も朱奈に走り寄る。

その様子を男は見てから静かに目を閉じて、力を放つ。

「金光明炎…炎天葬」

「逃げろ！！田中！！！」

今度の朱奈の叫びは本当に田中に届かなかった。

代わりに田中に届いたのは眩く輝く炎。

田中の視界は炎の包まれ、光で何も見えなくなる。

EP 1 - 16 決意

煙がはれ、朱奈の目に飛び込んできた光景はボロボロになり、道路に倒れている田中の姿。

雨が激しく打ち付ける田中の姿を見て、朱奈は昔の記憶が嫌でも蘇る。

「田中っ！田中っ！！」

朱奈は田中の所へ駆け寄ろうとするもエリザードに遮られる。
エリザードの身体で朱奈の視界は覆われ、田中の姿を見ることが出来なくなる。

「どけっ、エリ！田中が！」

朱奈はエリザードを退けようと、必死に訴える

「心配するな。殺しはしない。これはあくまで警告だからな。」

駆け寄ろうとする朱奈に攻撃は放った男が静かに近づく。

「がはっ！」

男の言うことは本当のようで、倒れていた田中は身体を起こそうとしている。

しかし、うまく力が入らないのか、また倒れてしまう。

「朱…奈…。」

倒れたまま朱奈の方に顔を向け、今にも消え入りそうな声で朱奈の名を呼ぶ。

そんな田中の姿を見て、出てくる涙を必死に抑えて、朱奈は決心する。

「エリ、私は別れの言葉を言いたい。」

先程のような強引さは無いが、静かに力強くエリザードに訴える。エリザードは困った顔をして黒髪の男に視線を送る。

「構わぬ。」

男は興味もなさそうに目を瞑り、それを承諾。

エリザードは頷き、朱奈に道を開ける。

朱奈は雨に濡れることも気にせず田中に歩み寄る。

「田中…。」

倒れている田中の手を強く握り、今にも泣きだしそうな声で、田中の名を呼ぶ。

「色々と迷惑をかけてしまい、すまない。お前にはどんな感謝の言葉も並べても、言い尽くせぬほど感謝している。」

見上げる田中には俯く朱奈の顔が嫌でも良く見える。涙で顔を塗らしながらも必死に笑おうとする朱奈の顔が。

「色々とすまない。これで田中とも、皆ともお別れだ。」

必死に笑顔を保ってきた朱奈の顔はどんどん涙で歪み、声は掠れる。

「私は、お前達に出会えて、本当に良かった。本当に楽しかった。本当にありがとう…」田中。」

そう言うのと、更に握る手の力を一度強くしてから、ゆっくりと田中の手を離す。

そして、後ろを一度も振り返らずに男の所へと戻っていく。

くそっ！…くそっ！…くそっ！…くそっ！…

動かない身体を必死に動かそうと必死にもがく。

「えり…。悪いが、隊長と朱奈を連れて先帰っててくれ。」

そんな田中の姿を見て、赤髪のオールバックの男は田中の所に歩いて行く。

「遠矢、朱奈『様』です。相変わらず口が悪いですね。それに何をするつもりですか？」

エリザードは歩いて行く男、もとい遠矢の姿を目で追いながら、質問する。

「あ？ コイツもしかしたら朱奈について何か知ってるかも知れねえから、聞きだすんだよ。ま、殺しはしないから安心しろよ。」

「そうですか。解りました。では、行きましょう、隊長、朱奈様。」

そう言って、エリザードは何かを呟いてから、手を前に伸ばす。

すると、手の先に突然扉が出現する。

扉が開き、先ず黒髪の男が入っていき、続いて朱奈が入ろうとする。くそっ！…楽しかっただと、だったら何でそんなにつらそうな顔すんだよ！…何で泣いてんだよ…何で…

朱奈が扉に入ろうとする直前、朱奈は田中を振り替える。

「田中…。」

そう呟く。

その顔には様々な感情が混ざったような悲痛の顔。

だったら何で…そんな顔で別れたりするんだよ…

田中は動かない腕を必死に朱奈に伸ばす。

距離的にも、精神的にもその腕は届かず、朱奈はエリザードと共に扉の中に消えていった。

残ったのは田中と遠矢のみ。

「よっ！残念だったな、ばれちまってよ。」

遠矢は倒れている田中の前にしゃがみ込む。

田中は遠矢を睨むが、その目にはもう力は宿っていない。

「その様子だと、アイツからは何も知らされて無いようだな。ま、賢明な判断だ。何か知ってたら、お前の首は飛んでたぜ。」

朱奈が今まで自分について全く語らなかった理由はこれ。
田中達の身の安全のためだったのだ。

「朱奈な…多分お前と過ごした記憶は全部消されちまうぜ。」
「!？」

「本当の自由を知っちまったからな。記憶を消されたら、アイツには、もう本当の自由は無いだろうな。お前…どうしたいよ？」

遠矢はまるで田中を試すかのように田中に質問する。

「何で…お前…」

「良いから、答える。お前はどうしたい。」

田中は少し考え、ゆっくりと答える。

「俺は…アイツが望む事をしたい…。」

「そうかよ」

遠矢はどこか満足したような顔して、立ち上がる。

「アイツはな…自由に成りたかったんだ。自由に生きて、自由に笑って、自由に恋したかったんだと。それがアイツの望みだ。」

「お前…一体…？」

「12時間後だ。」

「？」

「アイツの記憶を消す準備が整うまでの時間だ。」

田中は遠矢が一体何を言っているのか理解できない。

「アイツは自由になることを望んでる。もしかしたら、お前と一緒に居ることも望んでるかもな。なら…てめえのすることはただ一つ。

助けにこい！必ずな…。」

そう言つて、遠矢は田中から離れていく。

「おいっ！お前、なんなんだよ！」

「俺は遠矢つてんだ。大丈夫。お前が来るまでは俺が時間を稼いでおいてやるからよ。いいか！必ず来いよ！これは、俺からの依頼だ！頼むぜ、処理屋さん。」

そう言つて、田中の前から姿を消した。

遠矢が姿を消した事により、田中の緊張も解けたのか、意識がどんどん薄くなつていく。

遠くから田中の名前を呼ぶ声が聞こえる。

遠退く意識の中で、田中は心の中で固く誓つ。

必ず、自由にしてやると…

EP1-17 止む雨

殺したくなるほど、あの人の笑顔は好きだった。

殺したくなるほど、この人は優しい。

その人は、殺したくなるほど、憎らしい。

殺したくなるほど、面白い。

殺したくなるほど、嬉しい。

殺したくなるほど、悲しい。

だから、俺は殺したくなるほど、人が大好きだった。

だからこそ、俺は殺したくなるほど、俺が嫌いだった。

だからこそ…

『かつこよかった』

『まるで、正義のヒーローみたいだった』

そんな風に俺を評価してくれたアイツに俺は少し救われた気がした。

だからこそ、俺は、アイツの前では、アイツの味方していると、アイツが信じたかつこいい俺の姿のままでいると、そう決めた。

「うつ…。」

田中は意識を取り戻すと、勢い良く上半身を起こす。

周りを見ると、そこは住吉荘の田中の部屋でそこには、阿部や和気、香、光、美鈴の姿。

そして、驚くべきことに、マリアの姿がそこにはあった。

「ああ…良かった。気がついたんですね。」

起きた田中に気がついた美鈴が一番に田中に近づく。

「ひどい火傷だけど、命に関わらないケガはないそうです。暫く安静に…」

そう言う美鈴の言葉を遮り、田中は立ち上がる。

「な、田中さん！」

美鈴はそんな田中を止めようとするが、田中は無言で止まらない。

「どうするつもりだ。」

マリアはそんな田中に一言。

「助けにいきます。」

「渡利…。」

マリアはそう呟き、指を鳴らす。

田中の前に突然、サングラスに黒スーツの男が現れる。

この男の名は羽柴 渡利。

マリアの唯一の助手。

その男の殆んどを田中達は知らない謎の人物。

その男の出現に驚く間も与えず、田中は床に叩きつけられる。

「がはっ！」

驚くほどの衝撃に田中は息が一瞬詰まる。

「見る。お前の力はこんなもんだ。渡利すらまともに相手もできない。」

座っていたマリアは立ち上がり、倒れている田中に近づき、言葉を続ける。

「お前が相手しようとしているのは、渡利以上の奴等が何人も居る。お前が一人行った所で、朱奈に会うことなく、死ぬねがオチだ。この娘の言う通り、ケガが治るまで大人しくしている。お前の仕事はここで終わりだ。報酬は後で口座に振り込んでやるよ。」

そう言つて、そのままマリアは去ろうとする。

「だつたら……」

田中は立ち上がり、マリアを睨みながら、話す。

「だつたら、新しい仕事が入った。アイツを助けてくれってな。だから、俺は行く。」

マリアは少し呆れたように首を振った後、鋭い視線で田中を睨む。
「誰の依頼か知らんが、師として、弟子を死なせるような真似をさせるわけにはいかない。」

「だったら、俺は師匠を…アンタを倒してでも、助けに行く！」

マリアの視線にも怯まずに田中は反抗する。

「賢くなれ！お前が行っても死ぬだけだ！これはどうしようもない事なんだよ。」

「どうしようもないからって諦めんのかよっ！」

田中は息を荒げて、叫ぶ。

「アイツが自由を望むってんなら俺はアイツを助けに行く！相手が誰だとか知ったこっちゃねえ！俺はアイツと約束したから！」

「だからと言って…」

「諦める事が賢くなることだってんなら！」

マリアの言葉を遮り、田中は続ける。

「諦める事が賢くなることだってんなら、俺はずっとバカのまんまでいい！」

田中の目に宿る決意は強い。

「フツ。全くバカな弟子を持つと苦勞が絶えんな。ま、嫌いじゃないがな。」

マリアはまるで降参しましたと言うように両手を挙げて、笑いだす。

「良く言った！それでこそ我が弟子と言うものだ！準備しろ！私が

道案内してやろう。」

「は？」

突然の雰囲気の変化とマリアの変わりように田中は呆然とする。

「何を呆けている！私が道案内してやるって言ってんだ！さっさと準備しないか！」

いつの間にか、マリアはまるで母親のような笑みを浮かべている。

「はい！」

田中はそれを聞き、勢い良く返事をする。
そして急いで準備へかかる。

押し入れの奥から刀を二本取りだし、動き易い服に着替える。

すると、阿部や和気、香も準備をし始めている。

「お前ら……」

田中は驚いて準備する手を止める。

「ム……」

阿部が黙って田中に親指を立てる。

どうやら田中と一緒に戦ってくれるらしい。

「死ぬかも知れないんだぞ……」

そんな三人に田中は話す。

「何を言っている…。俺達はチームだろ…。依頼があれば、俺達も戦う。」

「阿部…。」

『私も』

そうホワイトボードに書き込み、香は田中に勢い良く見せつける。
「はっ。こんときぐらい喋れよ…。」

田中は少し涙ぐむ。

「お前だけにかっこ良い真似はさせないぜ！」

「バカ…。」

「オイ。バカって酷くない？こんときぐらい、名前で呼べよ！」

和気の憎まれ口も今は頼もしく聞こえる。

「私も行くー！」

「アンタはダメです！」

光も乗って来たので、そこは拒否。

これは田中達の問題。無関係な光を巻き込むわけにはいかない。

「ケチ…。」

光は少し怒った感じで頬を膨らませる。

「な…、な…、な…。」

美鈴は急な状況の変化に戸惑っていたが、ここで待ったをかける。

「待ってください！正気ですか、田中さん！？」
「美鈴さん。」

田中は美鈴に目を向ける。

「私は反対です！田中さんを一色家と戦わせるなんて！死んでしま
いますよ！」

「フリ…。美鈴さん、俺は行くよ…。」

準備を整えた田中は美鈴を後に部屋を出て行こうとする。

「待ちなさい！」

美鈴は叫ぶが田中達は止まらない。

「うおっ！？」

田中の右後ろにいた和気が突然半回転して背中から倒れる。その横
にはいつの間にも移動したのか美鈴が立っていた。

「行かせません！どうしても行くと言うのなら私を倒してからにし
なさい。」

「んな、なんと定番なてんか…ぐへっ！」

和気を片足で踏み潰し、田中を睨む。

その目には田中と同じ様な光が宿っていた。

「あなた達を死なせるわけにはいきません。死なせたくない…。死
んじゃダメです…田中さん。」

見ると、美鈴の目には涙。

「大丈夫です美鈴さん。」

それを見て田中はそつと美鈴の肩に手をのせる。

「大丈夫。俺達は死にません。死に行くんじゃない。助けに行くんです。だから言わせてください…。」

田中は一呼吸置く。

「行つてきます！」

そう言つて田中は部屋を後にする。

田中が続くように部屋を出る阿部達。

手で顔を覆い、しゃがみ込む美鈴と、それを慰めめるようにそつと背中を擦る光を残して、田中達は今、朱奈の元に出発する。

朱奈が拐われた時に降っていた雨はいつの間にか止んでいた。

住吉荘を出ると、近くの道路に有った黒く塗り潰されたスポーツカーのようなデザインの車に田中達は乗り込む。

運転席にはマリアが。

助手席には香。後部座席には田中、阿部、和氣が乗る。後部座席に三人は流石にキツイが文句は言えない。

そのままマリアはアクセルを踏み、車を急発進させる。いつの間にか、渡利の姿はどこにもなかった。

「あの…師匠、渡利さんは？」

和氣は運転しているマリアに恐る恐る尋ねる。

運転しているマリアは何故か毎回機嫌が悪いからだ。

「ああ？私も知らん！」

「知らんって…」

マリアの答に和氣は少し呆れている。

「ま、問題ないだろ！呼べば直ぐに来るし。」

マリアの運転は決して快適と言ったものではなく、制限速度をガンガン無視し、どんどん車を抜いていく。

その運転技術は素晴らしいものだが、車の振動はガツンガツン来ると、車を次々と追い抜いているため、左右に激しく動き、乗って数分で田中達は正直ギブアップ寸前だった。

「師匠…。あれ、魔術とかで瞬間移動的なモノは無いんですか…？」

田中は弱々しくマリアに聞く。

「私は空間移動系の魔術は苦手だな！下手したら、全く知らない場所のコンクリートにめり込む事もあるかも知れないし、それは却下だ！どうせ、一色家の日本の別荘はここから三時間程度で着くし、車の移動で問題ないだろ！」

ところで、と言ってマリアは続ける。

「お前いつの間に魔術を信じる様になったんだ？朱奈は使えないはずだし…」

「まあ、あれだけ見せつけられればな…」

田中は数時間前に魔術の片鱗を垣間見えている。

異常に輝く炎。

突然現れる扉。

あれを見て、まだ魔術を信じない田中ではない。

「一つ質問しても良いですか？」

その時の光景を思い出し、色々とマリアに聞きたい事があることを田中は思い出す。

「ん？何だ？」

「どうして師匠は朱奈を一色家から拐ってきたんですか？」

マリアの声が止まる。

暫くして、んゝと唸ってからマリアは語り出した。

「取り敢えず、お前達は一色家について、どれくらい知っている？」

マリアはハンドルを切りながら、田中達に質問をする。

「確か…神への扉を開く、すげえ宝を守っている一族だとか。」

和気は思い出すように目線を上に向けながら答える。

実際田中達が朱奈について知っているのはそれくらいだった。

「まあ、それだけ知ってれば上々だな。」

マリアはポケットから片手でタバコを取り出し、くわえて、火を着ける。

「正式名称は血印の赤宝と呼ばれる。一色家はこの宝を守っているわけだが、何分真理を無視して神の道を開いちゃうような宝だ。最早人智を超えちまっている。創った張本人でさえ、破壊できずに封印するしかできないほどだったんだからな。」

フーと煙を吐きながら続ける。

「人智を超えた宝は人の封印術じゃ抑えきれずに何度か暴走して、その度に多数の命が失われた。それで、先人達はどうかしてそれを鎮める方法を探した。じゃあ、一体その方法は何だと思う？」

マリアは少し前から目線を外し、怪しい視線を田中達に向ける。

誰もマリアの問に答えることは出来ない。

「ヒントはだな…その宝は人から産み出された赤ん坊のようなもので、その力の暴走は謂わば、夜泣きみたいなもんだ。じゃあ、夜泣きする赤ん坊に親は一体どうする？」

マリアは直ぐに視線を前に向けるがバックミラーに映った顔には、まだ怪しい笑みを浮かべている。

「そりゃ、抱き抱えて、あやしたりするんじゃないんですか？」

和気は不思議そうな顔で答える。

「ま、正解だな。つまり、血印の赤宝が選んだ一色家の人間の体にその宝を魔術で埋め込んで、安定させるようにしたんだな。要するに、人柱だ。」

「そんな…」

田中の顔がどんどん困惑の色に変化していく。

「む？気づいたか？その通り。今の人柱が朱奈なんだよ。」

「そんな！まだあんなに若い人間にそんな事！」

田中は有り得ないという顔でマリアを見る。

マリアはバックミラーで田中を確認して、一度間を開けてから、また語りだす。

「歳なんて関係無い。宝が選べば、その者に拒否権は無い。人柱と為った者は厳重に監視され、大切に取り扱いわれる。もちろん、その者達に本当の自由はない。」

先程までのマリアとは違い、苦い虫を噛んだような顔をしている。

「私が朱奈の元に来たのはな、朱奈の母親であり、先代の人柱である私の親友との約束だったからだ。自分はこの子に何もしてやれなかったから、一つ、私の代わりにこの子の望みを叶えてくれてね……。」

マリアはその時の朱奈の母親の顔を今でも鮮明に思い出せる。

「待ってくれよ。その言い方じゃ……。」

「ああ……ソイツは朱奈が七歳の時に死んだよ。」

バックミラーからマリアの顔は確認できない。

それでもマリアは語る。

「アイツはそもそも一色家の人間じゃなかった。先代の当主であり、朱奈の父親が日本を旅行中に偶然出会った女性に一目惚れ。何度もアタックして、やっと付き合うことに成功し、そのまま結婚ってな……。まあ、溺愛していたらしいしな、アイツも幸せそうだった。」

マリアはその事を語っていた時の親友の顔を思いだし、思わず微笑む。

「朱奈を産んで直ぐくらいに、当時の人柱が病死してな。直ぐに選定の儀式が行われ、ソイツが宝に選ばれた。旦那も一色家の人間も大層驚いたらしい。何せ初めて一色家以外の人間が選ばれたのだからな。まあ、旦那はそれを必死に否定し、何度も儀式を行ったが結果は同じ。ソイツは人柱に為った。」

「……」

田中達は黙るしかなかった。

「一色家の人間では無いために、宝の力を完全に抑えられなくなって、何度も小さい暴走をしていた。それはさぞかし辛い事なんだろう。何時も笑顔で弱音を言わないアイツがそこでは弱音を言っていたよ。」

マリアはまた煙を吐き、ため息をつく。

「そんなときだったな。朱奈が二歳の時に旦那が死んでな。それから五年後にソイツは力を暴走させて、死んでいった。そして、当時七歳だった朱奈が人柱に選ばれた。それから9年後、朱奈の精神もそれなりに成長したと判断した私は朱奈に会いに行き、アイツの自由に成りたいという願いを一時的にという条件付きで叶えてやったと言っわけだ。」

一通り語り終えたのかマリアは何も喋らなくなる。

「師匠は何でそんな一色家の人間と親友だったり、内情に詳しいんですか？」

「ん？私はその頃は近衛十隊の八番隊隊長だったからな。」

まさかの真実。

まあ、この人ならばそんなこと、あり得なくはないが。

何て田中は少し驚く。

「ちなみに、この件には協力者もいた。流石に私一人では一色家の嚴重なセキュリティから朱奈を拐う事なんて出来ないからな。」

「協力者？」

田中は何となく予想は出来ていた。

「遠矢という男だな。一連の出来事を聞くと、快く私に協力してくれた。」

「やっぱり」

田中は予想通りの答に思わず頷く。

「何だ？知っているのか？」

意外そうな顔で田中の方を振り向くマリア。

「まあ、今回の依頼はソイツがしてきたんすよ…。」

「成る程。全くあの男の考えることは私にも解らん。」

マリアは呆れた様な声を出してから、本題に入ろうとする。

「お前達、これから言うことは、必ず聞いておけ。」

マリアの声に緊張の色が混じり、自然と田中達にも緊張が走る。

「今、一色家別荘にいる近衛隊は、一番隊と五番隊の二部隊が存在する。皆、魔術や超能力やらバシバシ使ってくるから、ザコでも死ぬ気で戦えよ。更に気をつけなきゃいけないのが、一番隊だ。一番隊と言うのは、近衛十隊の総司令部であり、最強の部隊。近衛十隊は完全に実力制で、一色家の人間だとか、そう言ったものは関係無い世界だ。そんな中で最強の一番隊の隊長を務めているのが、現代当主であり、朱奈の兄である、一色 仙龍。因みに一番隊隊長の就任条件は、現、隊長三人を相手に勝つこと。」

その事実には田中達は衝撃が走る。

隊長三人を相手……つまり、マリアクラスの間を三人相手に勝ってしまった人間が、現代当主。

要するに、その男に勝たなければ、本当の意味での朱奈の自由はない。と言うことを意味しているからだ。

「腹くくれよ、てめえ等！もうびびったって遅いぞ！」

そう言って、マリアは更にアクセルを強く踏んだ。

EP 1 - 19 涙の訳

ポタンッ……

と葉の上に乗っていた雫が地面に堕ちる。

ほろり

と朱奈の頬を雫が流れる。

朱奈は静かに椅子に座り、窓から外をじっと眺めている。

じつと……

じつと……

ただ、じつと外を眺めている。

眺めては、溜め息つき、下に俯き、涙を流す。

先程からずっとこの状態。

そんな朱奈の姿を少し離れた場所から遠矢は眺めていた。

こちらにも、朱奈の姿を見ては溜め息つき、下に俯き、深く

深く

静かに、瞼を閉じ、後悔ばかりしている。

ここは、一色家別荘。

その敷地は広大。

そこから伺える一色家の財力は膨大。

白い塀で囲まれたその敷地の中は、平安時代の上位貴族の屋敷そのもの。

塀の内と外で、まるでタイムスリップしたかのような違いがある。
美しい庭園。

大小様々な古い日本様の屋敷。
それらの屋敷の繋ぐ渡り廊下。

美しい…と思わざるを得ない別荘である。

だが、どこか重い何かを感じさせる、キンツと研ぎ澄まされた緊張した空気がこの場を支配する。

その敷地の中に更に白い塀で囲まれた空間がある。

その名は花の御所。

そこには一つ屋敷が有るだけ、他には余った空間で造られた美しい庭園位しかない隔離された空間。

そこは、人柱のためだけの空間であり、特例を除いて、一色家の人間。一番隊の中でも、護衛部隊と呼ばれる特別な部隊に所属する者更に、当主に認められた使用人だけが、この花の御所に入る事を許される特別な空間。

静かだ。

何の音もしない。

不自然な程に静かな空間だった。

そこに朱奈は居た。

先程から溜め息ばかりしている。

最低だ…

朱奈は自分を蔑む。

自分が自由を求めたばかりに、田中は傷ついた。
田中を利用し、迷惑をかけ、突き放し、傷つけた。

最低だ…

ほろり……

と涙がまた頬を伝う。

怖かった

嫌だった

自分の目の前で大切な誰かが傷つくのは。

結局はそうだった。

自分を守っただけに過ぎない。

あの時、追ってきたエリと田中が戦うのを止めたのも

ぼろぼろになっても利用されていたと知っても朱奈のために動いた田中を止めたのも

去り際に一度しか田中を振り返らなかったのも

結局、田中が傷つくのを恐れたのではなく、ただ自分がそれを見るのが嫌だったから。

最低だ……

ポロポロと朱奈の服に染みがつく。

朱奈はこの世界が嫌いだった

欲望と

悪意と

掟

そんな世界が嫌いだった

朱奈は前当主の実の娘で、現当主の妹で、現一色家人柱である。

故に、それが持つ権力は強大で、それが持つ財力は膨大で、それが

持つ力は圧倒的であり、（あくまで、一般人又は権力者から見ればだが…）
現当主である兄に比べれば、圧倒的に手に入れやすく、そして間接的に兄を支配出来、そして間接的に世界を脅す力を手に出来る。

故に、自然と、勝手に、朱奈の意図とは関係無く、朱奈の周りには人が集まる。

そして、その中の多くが、全てとは言えないが、かなりの人数が、傲慢で、強欲で、醜悪な権力者。

その者達の目には朱奈の姿など映っておらず、それを手に入れんとする悪意の光が目宿っている。

嫌だった。

更に、朱奈は人柱である。

その力は神の道を開くと言う圧倒的な力。
道を開かずとも、それが持つ力で容易に世界を掌握できる。

だから、自然と、勝手に、朱奈の意志など関係無く、敵意と悪意は集まる。

この世界には異質な存在がいる。

例えば、魔族。

魔術により、人間を辞め、神に呪われた異質。

例えば、天使もどき。

これも又、魔術により、天使に近づいた、其が故に神に呪われた異質。

それらは自ら招いた罰を、神の呪いを消す為に朱奈を狙う。
その異質が放つ敵意や悪意は、人間とは比べモノにもならないほどに又、異質。

それらは朱奈に牙を剥く。それは最早朱奈にとっては呪いに近かった。

だから、この世界は嫌いだった。
だから、自由に成りたかった。

同じ様な境遇に居たであろう母は、それでもこの世界を愛していた。

それを思い出し、自分もなるだけこの世界を愛そうとした。

あの人も世界を愛していると言っていた。
だから、自分も世界を愛そうとした。

でも、朱奈には出来なかった。

朱奈が愛そうとした世界は、その者達が愛していた世界であり、朱奈が愛していたのはその者達でしかなかったからだ。

その者達も死んだ。

この世界を愛そうとする努力の意味も無くなった。

それから朱奈はより一層自由に成りたいと願った。
敵意も悪意も異質も一色家という名の重みも全て忘れて自由になりたいと強く願った。

しかし、住吉荘に行ってみて、朱奈は愕然とする。

この世界の素晴らしさと自分の無力さに。

わたあめは甘く、田中が作った料理は旨く、皆で囲む食卓は愉しく、皆で過ごす時間は何よりも貴かった。

大丈夫だと思った。

この者達が居れば、この記憶さえ有れば、自分はまだこの世界を愛せると。

結局は、その世界では無く、その者達であるのだけにと…

そしてその世界で自分は無力だった。

結局の所自分の力とは、自分の誇れるモノは一番疎ましかった一色家という名だけだった。

滑稽な話である。

朱奈は流れる涙を拭おうとはしなかった。

兄上は言っていた。この記憶を消し去ると。

この涙の意味を朱奈は忘れるだろう。

何故こんな世界を愛していたのか、理由を忘れるだろう。

そして、また無意味で無価値な世界が訪れて、朱奈はその世界を呪いながらただ死んでいくのだろう。

嫌だった。

また住吉荘で過ごしたいと思った。

そんな資格は無いのだけれども。

皆を我が儘に利用し、理不尽に傷つけた。

そんな自分にもう一度戻りたいと思う資格は無い。
有るはずが無い。

それでも心はそう願ってしまふ。

最低だな……

と朱奈は自分を蔑み、静かに目を閉じる。

朱奈は自分が解らなくなっていた。

一色家、皆、田中、自分、掟。

色んな物が混じり合い、自分がどうしたいのか解らなくなる。

こんな時、あの人は自分に答をくれたのだろうか。

おそらく、簡単に答を覚えてくれただろう。

笑って、諭すように優しく。

……海北殿……

朱奈は深く、深く、その名を呼ぶ。

「母上！母上！」

今では異常な位静かな花の御所に、無邪気で暗さを知らない明るい声が響く。

少女が扉を開くと、和風造りのベッドから上半身だけを起こした状態でその女性は笑顔を浮かべて来訪者を歓迎する。

「何か有ったの、朱奈？」

その女性は朱奈に良く似て美しく、しかし、何処か違う雰囲気を感じている。

当時、朱奈、四歳。

この物語は無邪気に、無駄に、無知にこの世界を愛していた朱奈がこの世界に価値を見出だせなくなるまでの話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1970/>

女神と殺人鬼とバカと野獣と

2010年10月14日21時35分発行